

は胴上半部に逆U字状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。16は口縁下に1条の沈線、22・23は列点文が巡る。20はこうした区画は存在しないが、地文縄文の回転方向を変える手法に、わずかに口縁部文様帯の意識をとどめている。20・23は磨消しモチーフ間にわらび手状の沈線が垂下する。

24は口縁部文様帯下端を区画する横位の沈線がみられる。胴上半部にはU字・楕円形などの磨消しモチーフが描かれ、モチーフ間にわらび手状の沈線が垂下する。25は波状の磨消しモチーフが対向する胴部中段の破片であると思われる。

27は磨消し懸垂文である。26・29はこれから変化したH字文である。28は磨消し連弧文の胴部中段で、横位の平行沈線間に円形の刺突列が巡る。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

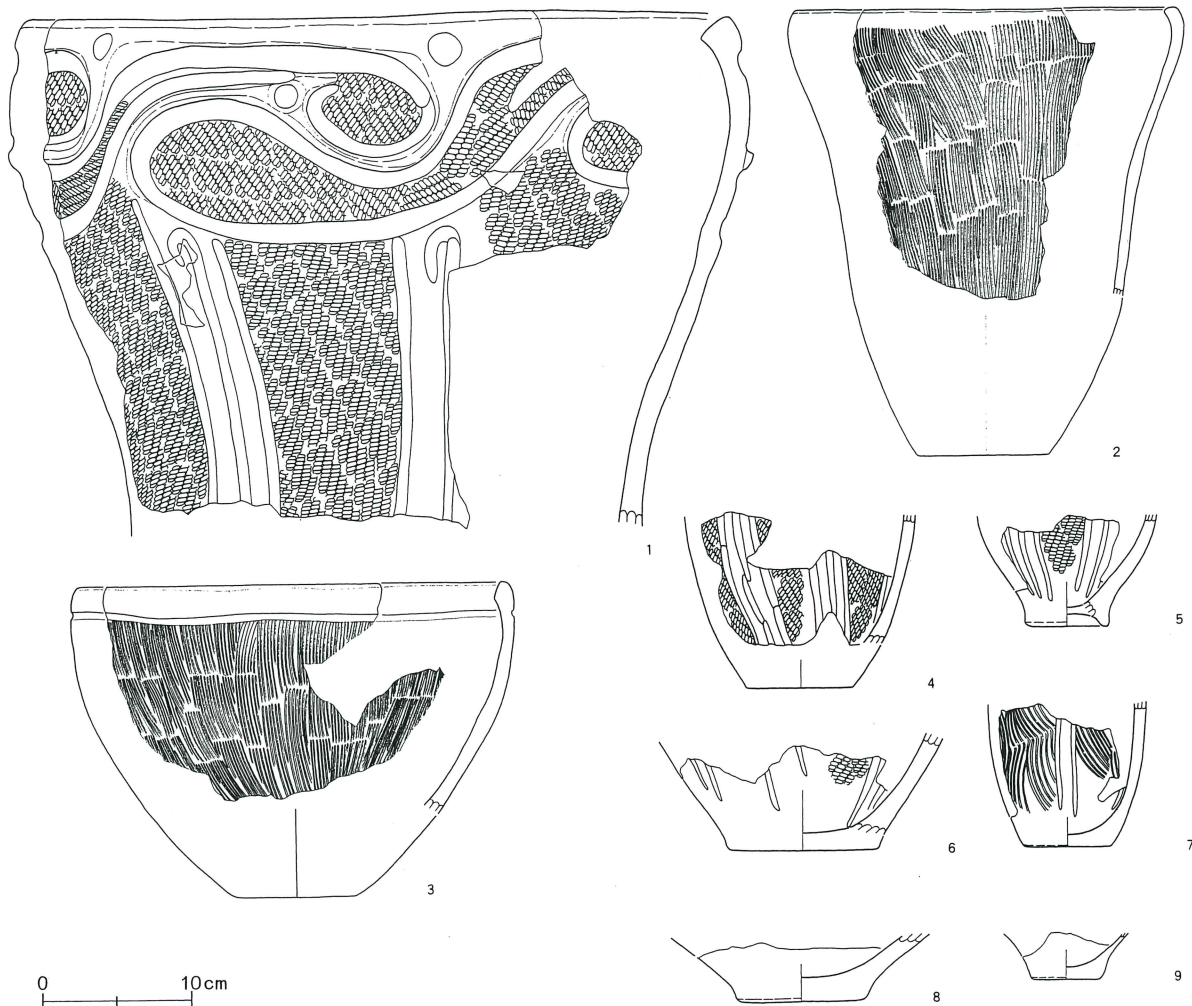
30は幅広の平行沈線の懸垂文である。地文は櫛歯状工具による波状の条線が縦位に垂下する。31は縦位の条線だけが施文される胴部である。32は磨消し懸垂文だが、極めて微細な縄文を地文とする。

33は両耳壺胴上半部の文様帯である。隆帯+沈線で渦巻文が描かれ、地文はLR単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。34は両耳壺に伴う橋梁状の把手である。背面にわらび手状の凹線が描かれる。35・36は両耳壺の口縁部である。いずれも垂直に近い角度で立ち上がり、口端部がわずかに外反する。37は両耳壺の肩部である。

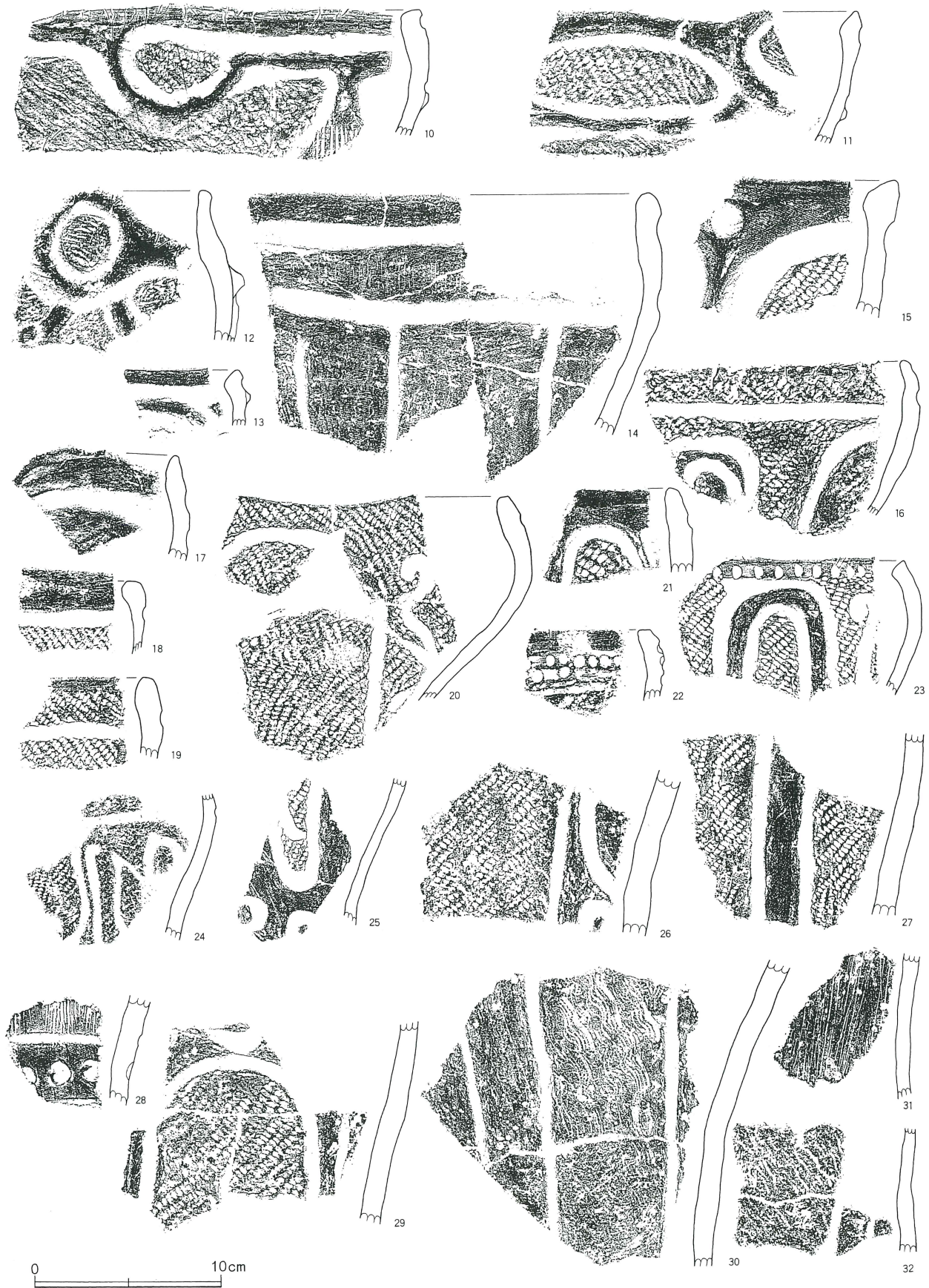
38はキャリパー類の口縁部文様帯の一部であるが、下端を隆帯によって区画し、頸部に無文帯を持つ。

39は両側に凹線のなぞりを伴う隆帯である。40は曾利系の土器で、刻みを伴う隆帯と斜行する集合沈線が

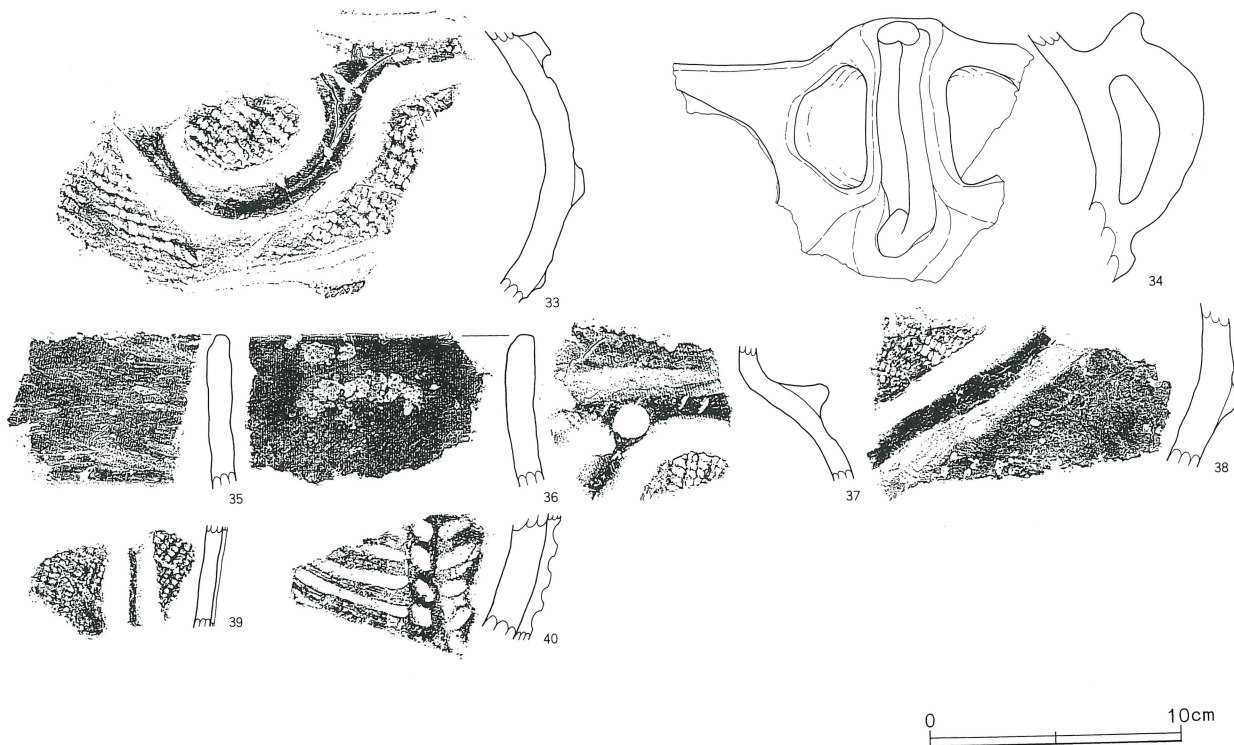
第380図 D区第8号住居跡出土土器(1)



第381图 D区第8号住居跡出土土器(2)



第382図 D区第8号住居跡出土土器（3）



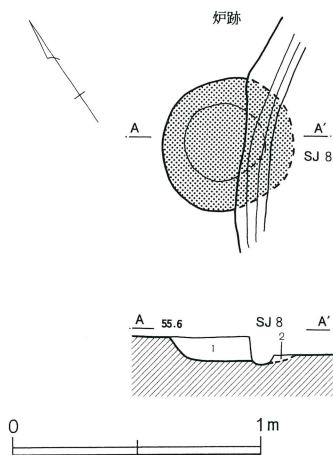
樹枝状のモチーフを描く。

D区第9号住居跡（第383図）

D-19区に所在する。第8号住居跡に切られる。

第8号住居跡の北西壁で炉跡だけを確認した。円形の地床炉で、直径54cm、深さ9cmを測る。

第383図 D区第9号住居跡



D区S.J 9炉跡

- 1 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子極めて多く、焼土ブロック若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子極めて多く、焼土ブロックごく少量含む 粘性あり、締まりよし

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

D区第10号住居跡（第384図）

E-20区に所在、D区南部の住居跡群中最も北に位置している。西壁および南壁の一部を検出したのみで、大半が調査区域外に存在している。したがって、本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は一切不明である。壁高は残りの良い部分で22cmを測る。壁溝は検出されなかった。

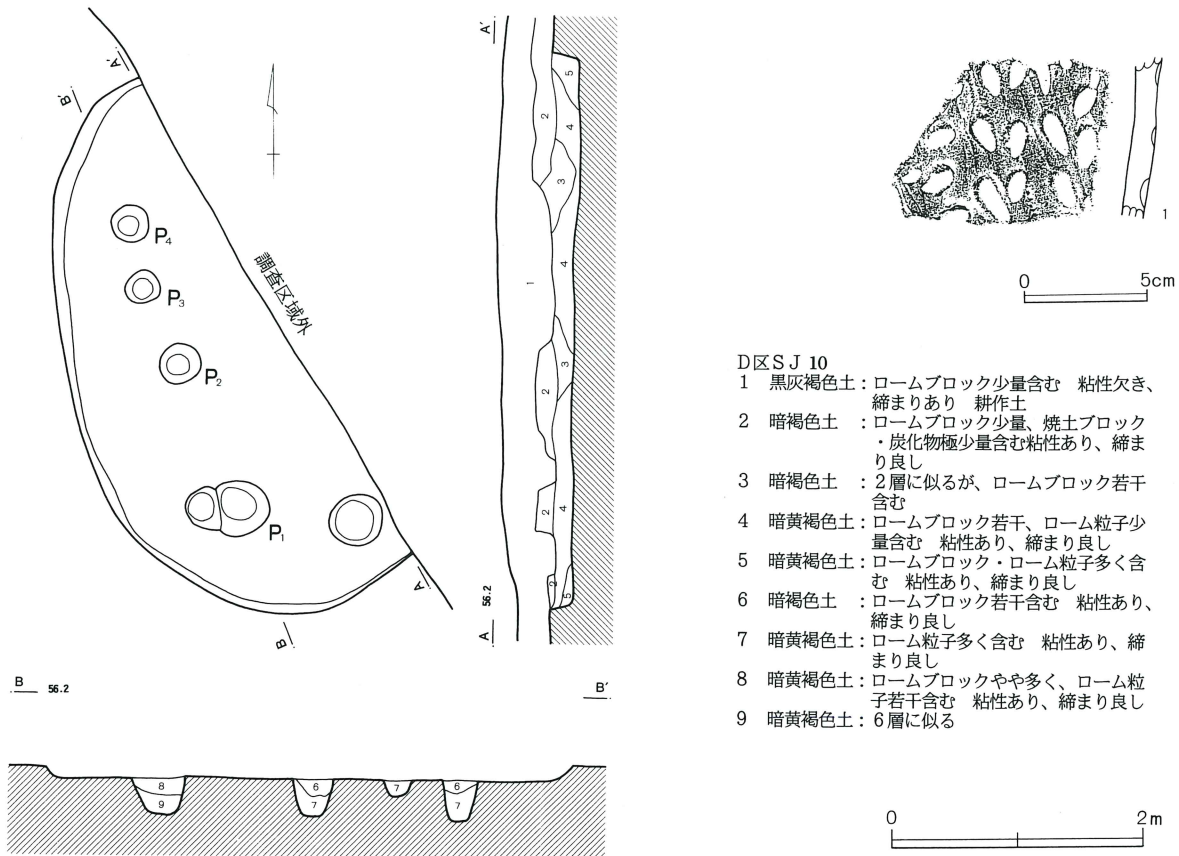
炉跡は検出されなかったが、調査区域外に位置している可能性が高い。床面上からは5本のピットが検出されたが、住居跡全体の柱穴配置は不明である。

遺物は中期後葉から末葉の土器片数点が出土したのみで、いずれも小破片である。

出土土器（第384図）

1は曾利系の深鉢胴部である。ハの字状の列点文が縦位に施文される。

第384図 D区第10号住居跡



D区S J 10

- 1 黒灰褐色土：ロームブロック少量含む 粘性欠き、縮まりあり 耕作土
- 2 暗褐色土：ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物極少量含む粘性あり、縮まりよし
- 3 暗褐色土：2層に似るが、ロームブロック若干含む
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり、縮まりよし
- 5 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性あり、縮まりよし
- 6 暗褐色土：ロームブロック若干含む 粘性あり、縮まりよし
- 7 暗黄褐色土：ローム粒子多く含む 粘性あり、縮まりよし
- 8 暗黄褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、縮まりよし
- 9 暗黄褐色土：6層に似る

第11号住居跡（第385図～第391図）

C・D-18区に所在する。第12・15・38号住居跡を切り、第15・17・18号土壌に切られる。円形の住居跡で、直径約5mを測る。壁溝は残りの良い部分で14cmを測る。主軸方向はほぼ北を指すものと思われる。

壁溝は2本ないし3本が切り合っており、最低1度の拡張を経験しているものと思われる。

床面上および壁溝中から12本のピットが検出された。床面からの深さは50～70cmで、P3・8が炉跡を頂点とする三角形配置を構成するほかはいずれも壁溝と重複する状態で検出されており、初原的な壁柱穴配置を見ることができる。

炉跡は床面中央に位置している。非常に大型の地床炉で、一辺1.2mの隅丸台形を呈する。深さは17cmを測る。炉跡中央部に一辺50cmの隅丸方形の窪みが存在し、この部分に第387図1の土器の大型破片が敷き詰められたような状態で出土した。これは土器片を敷き詰めた状態で使用されたものではなく、廃絶時に炉床

面を覆うようにして置かれたものと思われる。この土器片以外に前述の窪みを巡るようにして若干の礫を検出したが、これらは石囲炉のような体裁を整えてはいなかった。

本住居跡は床面上に配礫を伴っている。これは住居跡北壁から約1mを隔てて、壁のカーブに沿って5点の人頭大の礫が均等に配置されていたもので、住居の奥壁空間に対応するものと考えられる。これらの礫のうち東から2つめのものは花崗岩製の磨石（第528図85）が転用されている。

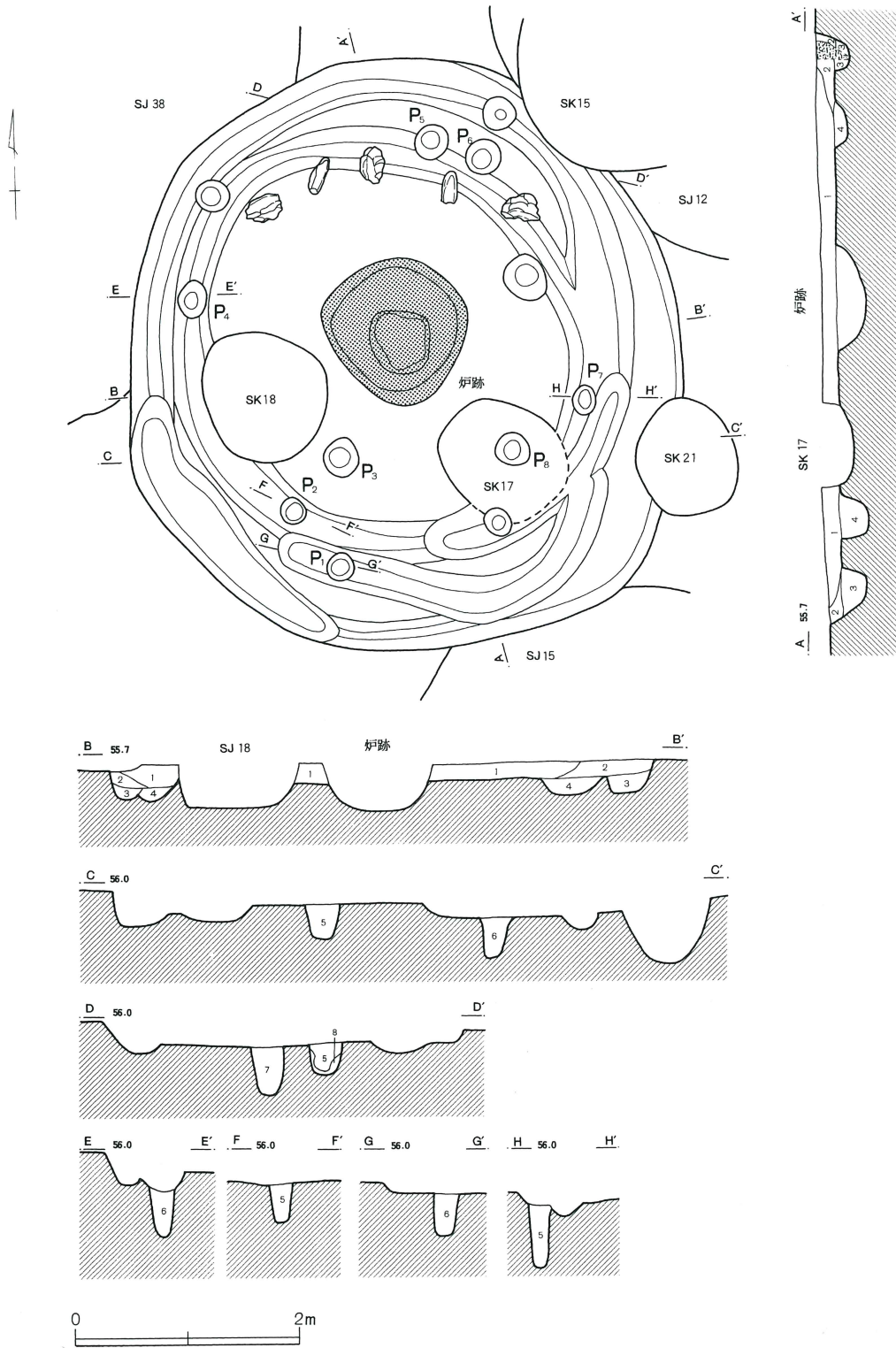
本住居跡の覆土中からは縄文時代中期後半から末葉の土器が出土している。

出土土器（第388図～第391図）

1は炉跡から出土したもので、曾利系の隆帯文土器である。縦長で紡錘形の胴部のうち、胴部中段のくびれ部分と、底部に近い部分の2カ所に分かれて出土している。

指頭状のものによる圧痕を伴う隆帯が一定の間隔を

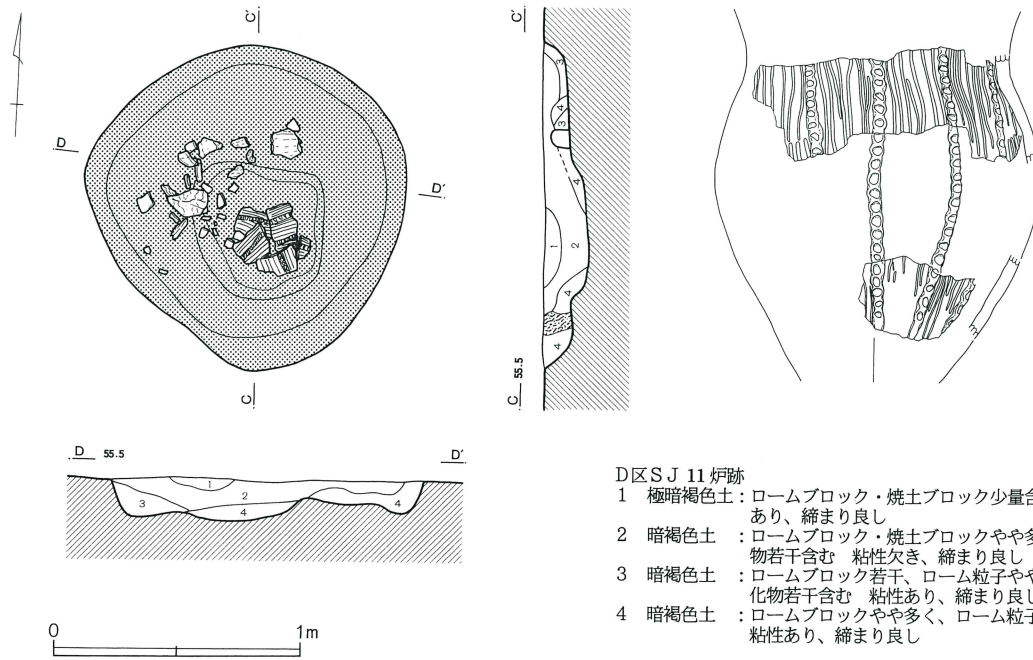
第385図 D区第11号住居跡



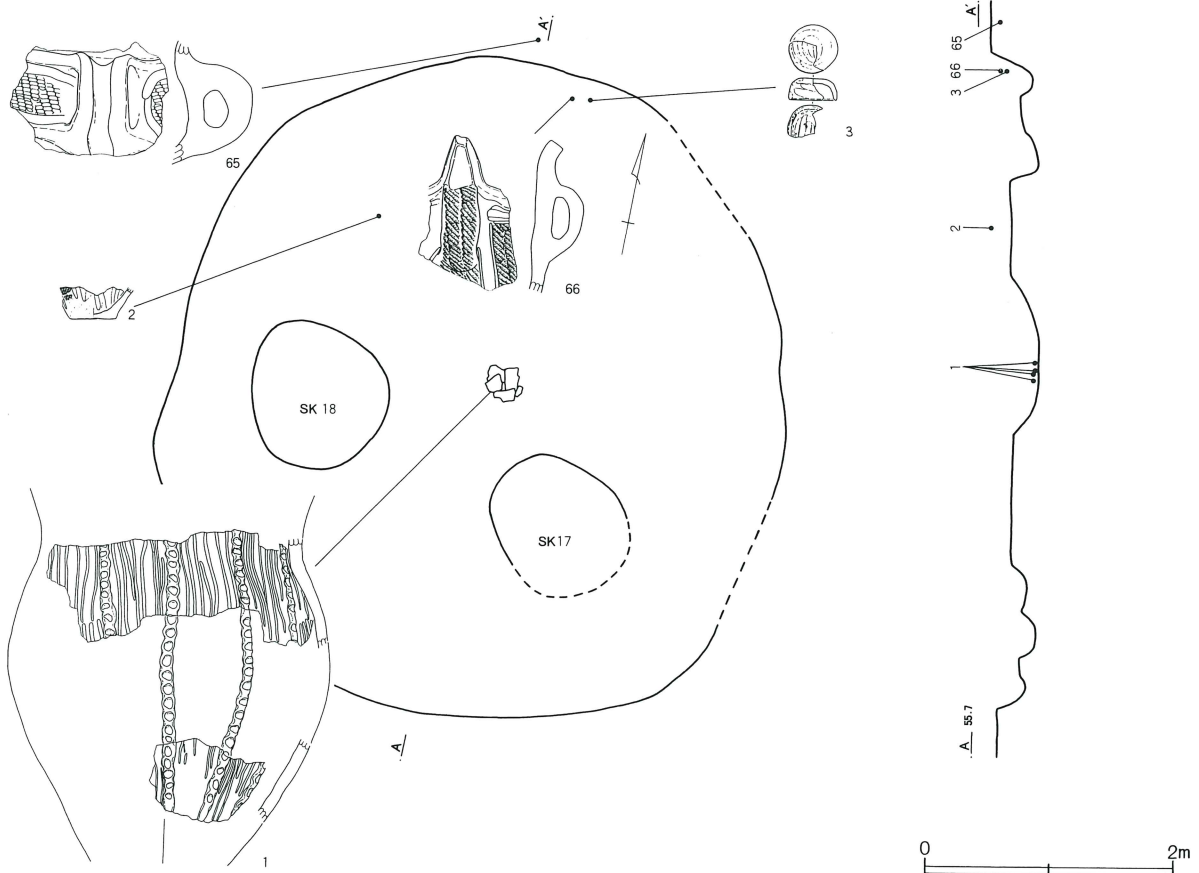
D区S J 11

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>2 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>3 暗黄褐色土 : ローム粒子極めて多く含む 極めて粘性に富み、締まりよし</p> <p>4 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし</p> | <p>5 暗褐色土 : ロームブロック極少量、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>6 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>7 極暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性あり、締まりよし</p> <p>8 黄褐色土 : 黒色土若干含む 粘性あり、締まりよし</p> |
|--|---|

第386図 D区第11号住居跡炉跡



第387図 D区第11号住居跡遺物分布図



において垂下する。地文として棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。

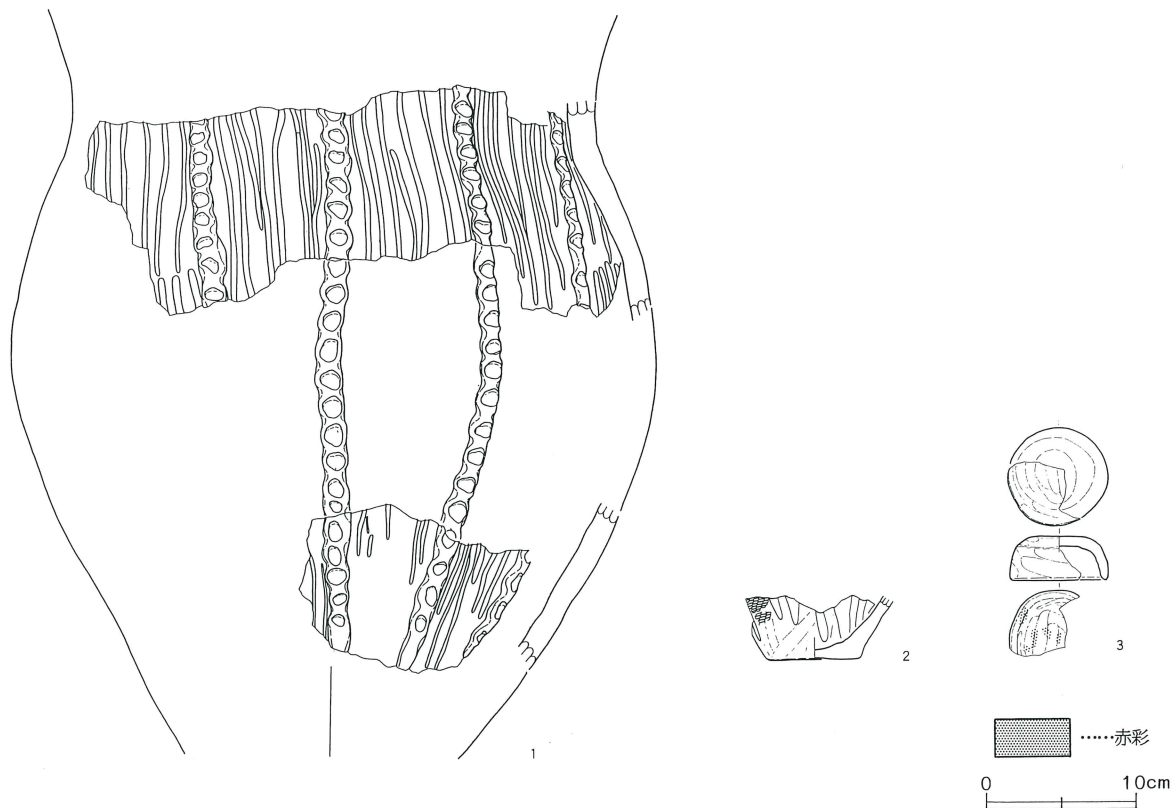
2は深鉢底部である。非常に太く浅い沈線を用いた磨消し懸垂文が施文される。地文はRL単節の縄文である。底径6cmを測る。

3は土製の蓋である。頂部にわずかな平坦面を持つドーム形で、全体の約1/4程度が残存している。表裏ともに無文だが、内面に若干の赤色顔料の付着が観察される。最大径6.6cm、器高2.9cmを測る。

4~19はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。4~11は水平口縁である。4は波状の隆帯により楕円形の区画が構成され、縦位の隆帯上に円形の刺突が施される。

12~18は波状口縁である。14は末端わらび手状となるU字状の沈線によって楕円形の区画が描かれる。17は口端の突起上にわらび手状の沈線が描かれる。19は水平口縁で無文地に波状の隆帯が巡るもので、やはりキャリパー類の口縁部であると思われる。

第388図 D区第11号住居跡出土土器(1)



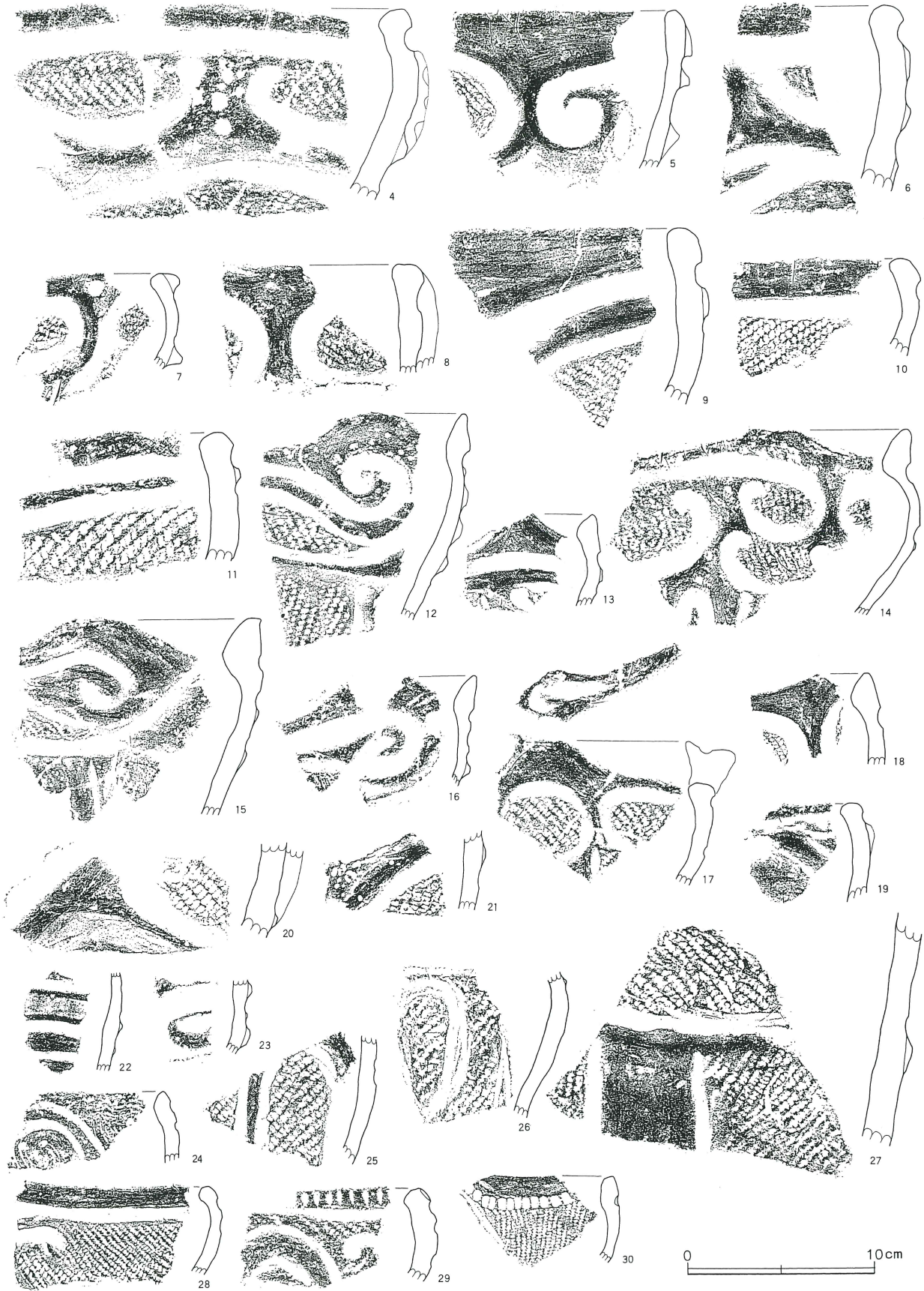
20~23・27はキャリパー類の口縁部文様帯の一部であろう。24は逆U字状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。25も同様のモチーフが描かれる口縁部付近の破片である。26は粗雑な楕円文が描かれる。29~32は列点文が巡る口縁部である。

33は口端上に逆円錐形の突起が配される。34は梶山類である。35は円形の刺突列が巡る胴部中段である。胴下半部には逆U字状の磨消しモチーフとわらび手状の沈線が描かれる。36~59は磨消し懸垂文の胴部である。

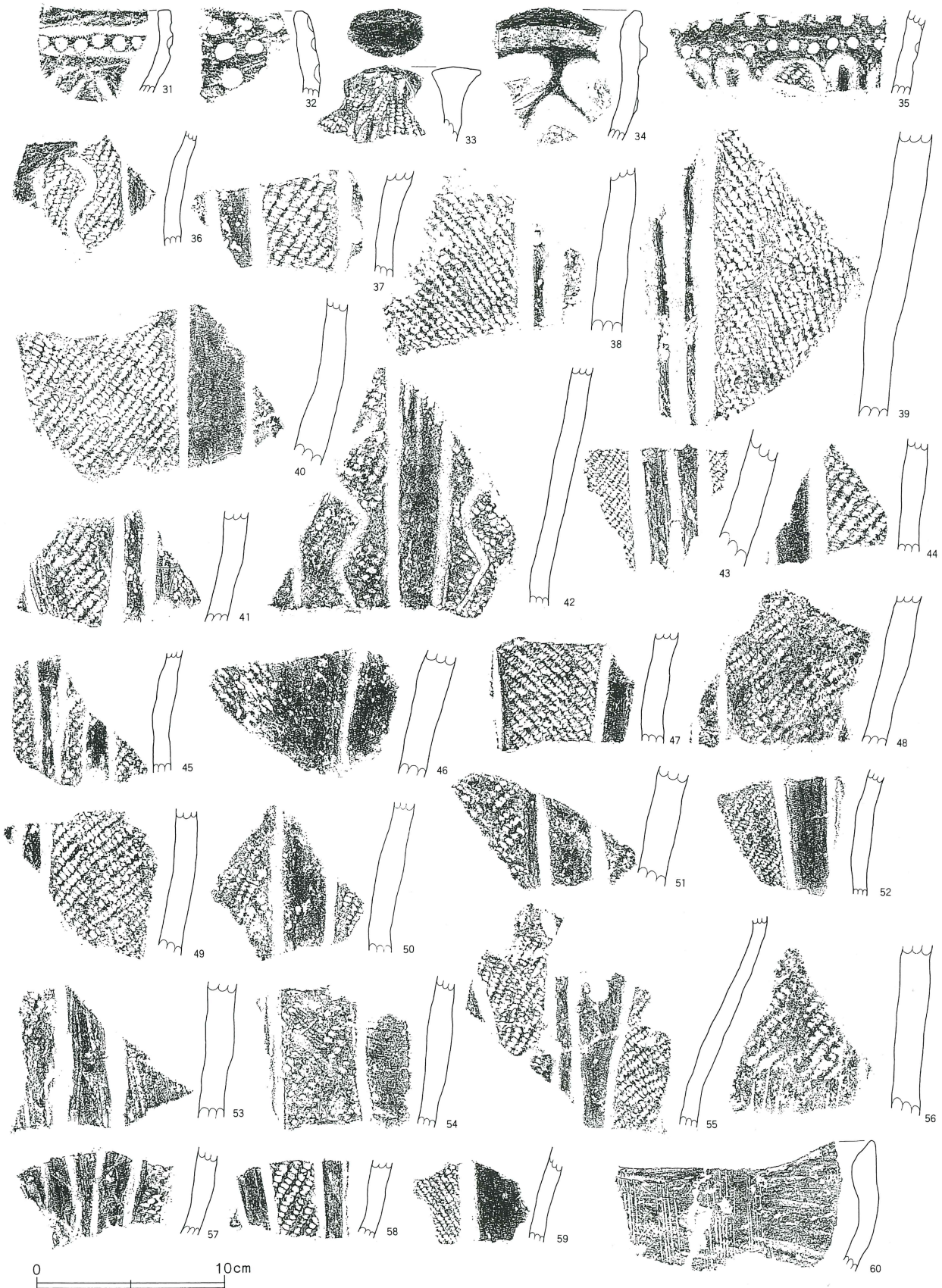
60・61は縦位の条線が施文される口縁部である。62~65は両耳壺である。62・63は無文の口縁部、64は胴上半部の文様帯である。65は胴上半部に付される環状の把手である。

66は角錐状の突起と橋梁状の把手が付される深鉢口縁部、67はひさご形土器の胴下半部である。68は縦位の条線が垂下するもので、浅鉢か両耳壺の胴下半部であろう。69・71は曾利系の隆帯文土器である。

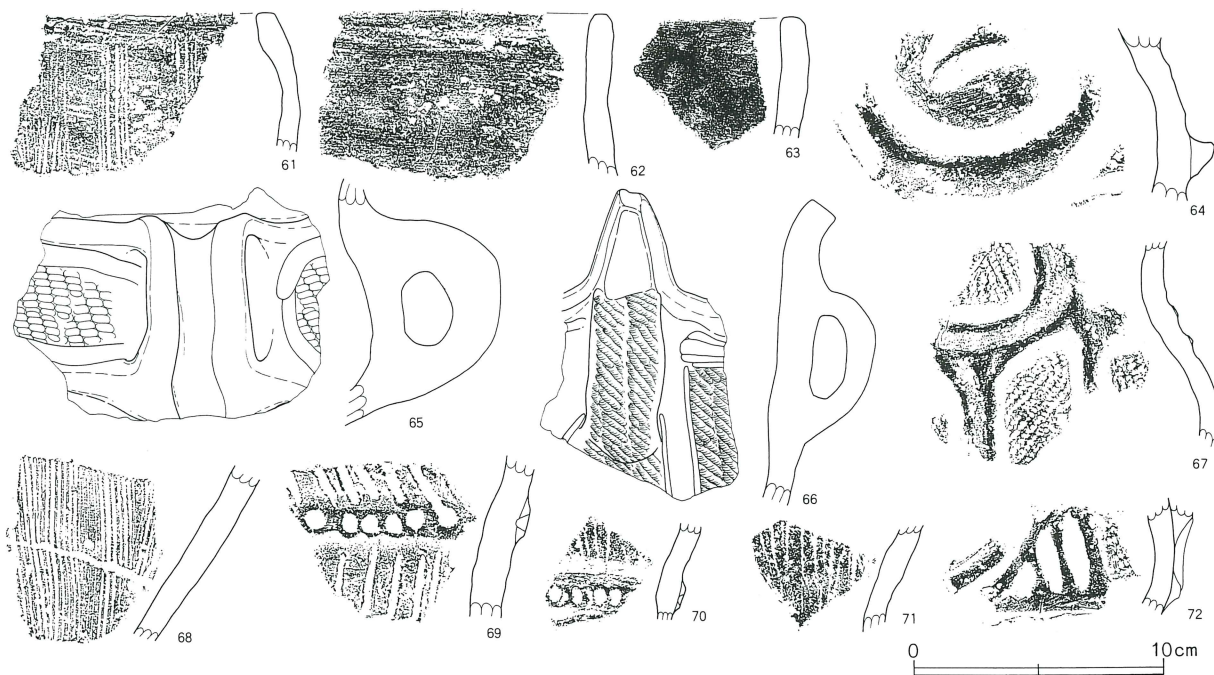
第389图 D区第11号住居跡出土土器(2)



第390图 D区第11号住居跡出土土器(3)



第391図 D区第11号住居跡出土土器(4)



D区第12号住居跡(第392図～第393図)

D-18・19区に所在する。第7号住居跡に切られている。第8・11・40号住居跡、第15・16・20・22号土壇とも重複するが、新旧関係は不明である。

隅丸長方形の住居跡で、長径5.6m、短径4.3mを測る。主軸方向はN-45°-Eを指す。遺構上面が削平を受けており、壁は全く残存しない。壁溝は1巡し、重複はみられない。

炉跡は主軸線上南西寄りに位置している。不整円形の地床炉で、炉床中央にさらに円形の落ち込みを伴う二段の掘り込みをもつ。直径1m、深さ36cmを測る。焼土の堆積はさほど顕著ではない。

床面上から十数本のピットが検出された。いずれも小規模で、配置にも規則性はみられない。また、別個の遺構が重複している可能性もある。本住居跡の柱穴配置は不明である。

壁溝覆土を中心に縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。

出土土器(第393図)

1は他の出土遺物よりも古段階の土器で、覆土中への混入とみられる。キャリパー類の深鉢口縁部である。口端直下に1条の隆帯が巡り、沈線のなぞりが加えら

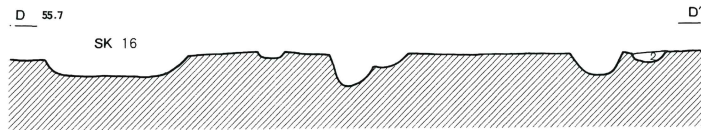
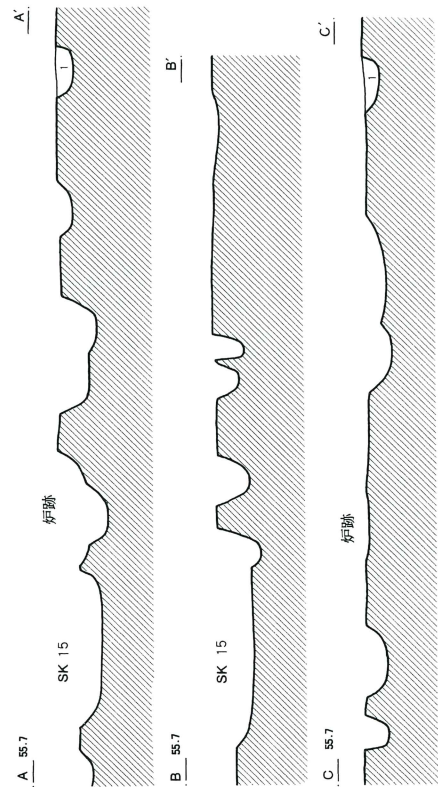
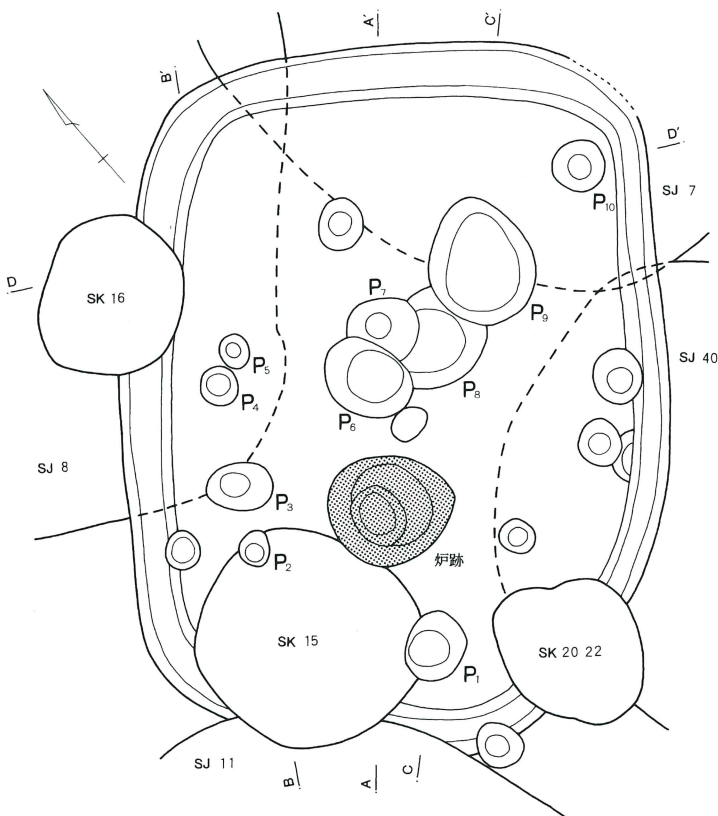
れる。口縁部文様帯は両側に沈線のなぞりを加えた浮線文で、斜行する浮線による三角形の区画内部に同心円文が描かれる。

2はキャリパー類深鉢口縁部に付される台形の板状突起である。外面は無文、内面に太い沈線による渦巻文が描かれる。本住居跡と重複する第15号土壇出土の深鉢(第509図1)に類似の突起がみられる。3～7は深鉢口縁部の破片である。いずれも隆帯渦巻などの口縁部文様帯を持っていない。3は口縁下に1条の沈線が巡る。4は強く内湾する口縁で、口縁下に1条の沈線が巡り、胴上半部にわらび手状の沈線が垂下する。5は波状口縁で、やはりわらび手状の沈線が垂下するものである。6は口端直下に列点文が巡り、胴上半部に逆U字の磨消しモチーフが描かれる。7は縄文のみ施文される口縁である。

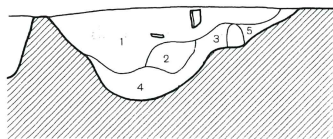
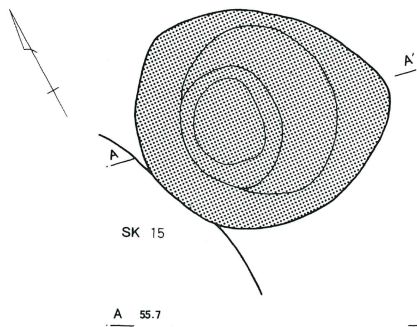
8・9はキャリパー類の口縁部文様帯である。10は口縁部下端の区画で、胴部に磨消し懸垂文が垂下する。

11～19は磨消し懸垂文の胴部である。14・15は充填縄文的な施文手法を取っており、単なる懸垂文ではなく、何らかの磨消しモチーフの一部であるかもしれない。21も磨消し懸垂文であるが、地文のRL単節斜行縄文に、下方から櫛歯状工具による波状の条線がか

第392図 D区第12号住居跡



炉跡



D区S J 12

1 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まりあり

2 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む

D区S J 12 炉跡

1 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強

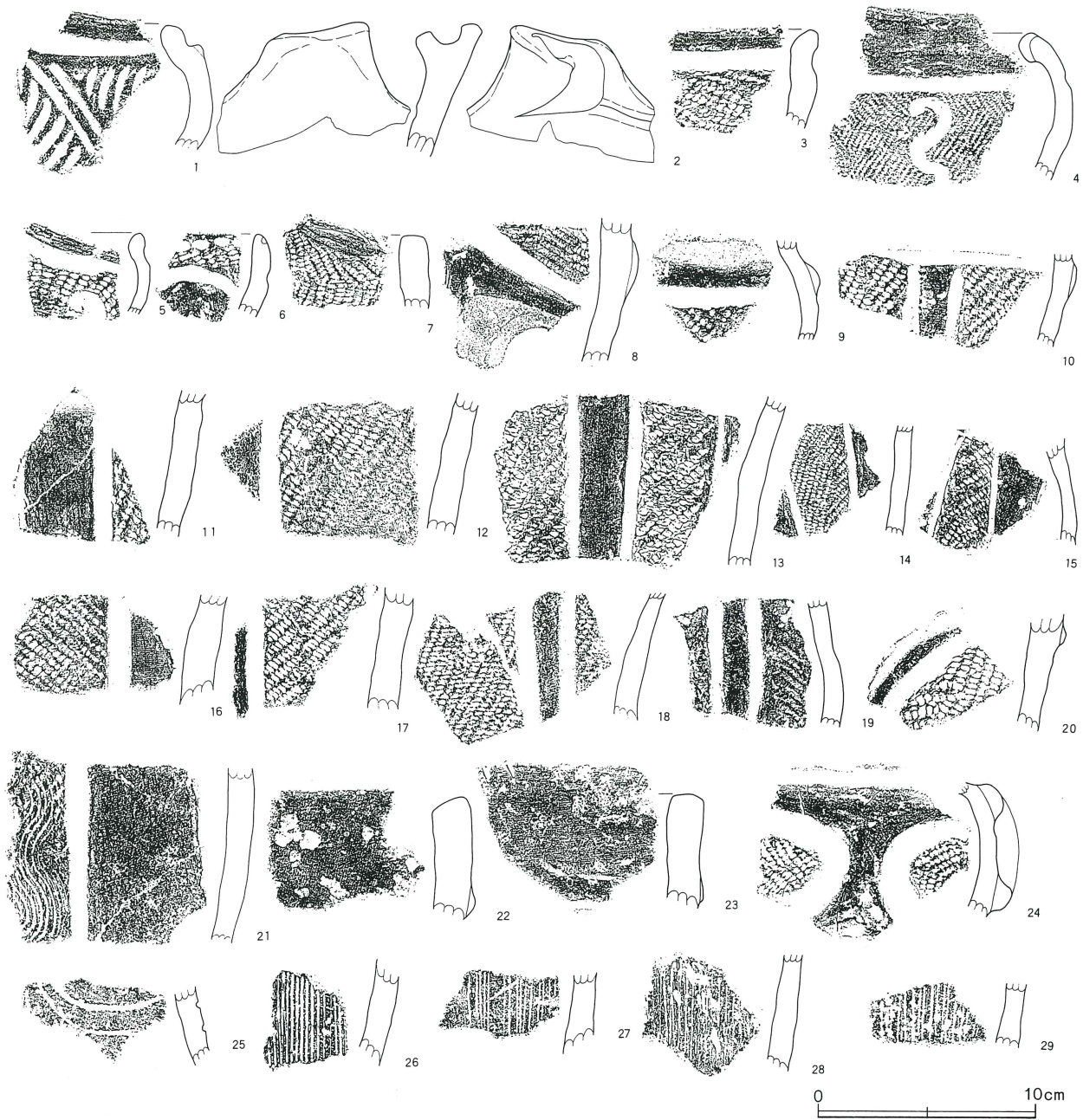
2 暗褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強

3 褐色土 : ローム粒子多く含む 締まり弱

4 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多く、焼土粒子・炭化物少量含む 締まり強

5 褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多く含む 締まり強

第393図 D区第12号住居跡出土土器



ぶっている。

20は幅広の沈線によるなぞりを伴った二本隆帯で渦巻文が描かれる。地文はLR単節の縄文が充填施文される。

22・23は口縁下に断面三角形の隆帯が巡る。22の口端は断面内削ぎ状、23は口端上部が平坦に整形される。いずれも深鉢の口縁部であろう。

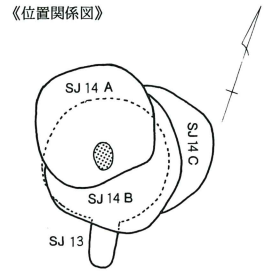
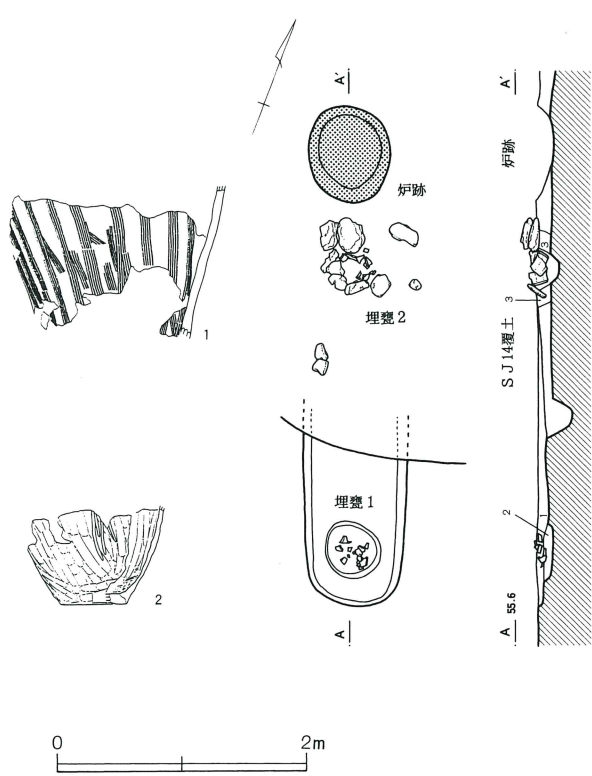
24は両耳壺の胴上半部の文様帯である。隆帯+沈線

で楕円形の区画文が描かれる。

25は磨消し連弧文風の文様が描かれる深鉢胴部である。二本沈線で弧状モチーフが描かれ、内部の地文が磨消される。地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

26～29は櫛歯状工具による縦位の条線が施文される胴部である。

第394図 D区第13号住居跡



- D区S J 13
- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりよし
 - (埋壑1)
 - 2 暗褐色土 : ロームブロック極少量、ローム粒子少量、炭化物若干含む 粘性あり、締まりよし
 - (埋壑2)
 - 3 極暗褐色土 : ロームブロック極少量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりあり

D区第13号住居跡 (第394図～第395図)

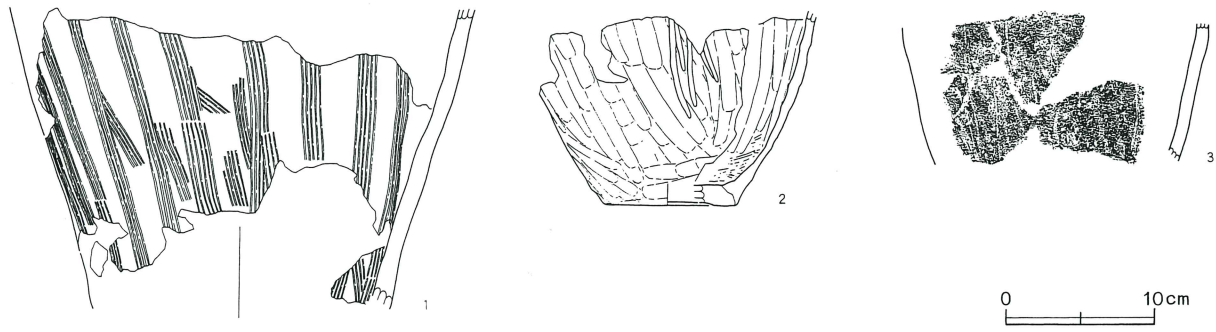
D-17・18区に所在する。第14号住居跡を切っている。本住居跡は最初、第14号住居跡覆土上面で炉跡と埋壑を検出し、それらの記録と取り上げをひとまず完了した。その後第14号住居跡の覆土を完掘し、周辺の精査を行ううちに埋壑を伴う張り出し部とみられる落ち込みを検出した。これを柄鏡形住居跡に伴う張り出し部であると判断し、以前検出された炉跡及び埋壑との位置関係を座標上で照合した結果、両者を単一の住居跡に伴う施設とするのが自然であるとの結論に達し

た。

本住居跡の掘込みは張り出し部先端を除いて第14号住居跡覆土中に存在したため検出できなかった。したがって本住居跡の正確な規模・平面形は不明であるが、諸々の施設の距離的な関係から大まかな規模を割り出すなら、次のようになる。

炉跡の中心から張り出し部先端までの距離は約3.6m、これをおそらくは円形の住居跡主体部の直径に等しいものとするならば、張り出し部先端から奥壁までの距離は約5.4m、張り出し部の長さは約1.8mで、炉

第395図 D区第13号住居跡出土土器



跡寄りの埋甕は主体部と張り出し部の接合部から90cm余り内側に設置されていることになる。

以上のような距離的關係はA区第48号住居跡、D区第32号住居跡等、今回検出された中期末葉の柄鏡形住居跡の規格からみても自然なものであると考えられる。

炉跡は楕円形の地床炉である。長径75cm、短径65cm、深さ12cmを測る。埋甕は2基検出されたが、これを炉跡から遠いものから順に埋甕1、埋甕2と命名した。

埋甕1は深鉢胴下半部を正位に埋設したものであったと考えられるが、耕作に伴う攪乱を受け、検出状態では破片の状態であった。掘り方は直径45cm、深さ5cmの不整円形のピットで、土器はピットの検出面付近に散乱していた。

埋甕2は深鉢胴部中段を正位に埋設したもので、周囲に隅丸長方形の配礫を伴っている。配礫は10~20cm大の礫10点ほどを組み合わせたもので、東辺の一部を破壊されているが、全体の規模は長径60cm、短径50cmである。埋甕の掘り方は検出できなかったが、埋設土器直下に土器と同サイズの小ピットが存在する。

本住居跡の柱穴は検出されていない。埋甕の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

出土土器（第395図）

1は埋甕2である。深鉢の胴部中段で、口縁に向かってハの字状に直線的に開く。櫛歯状工具の条線が間隔をおいて垂下し、それ以外に地文らしきものはみられない。復元最大径31cm、現存高20cmを測る。

2は埋甕1である。深鉢胴下半部から底部にかけて残存する。器面は著しく削り込まれており、非常に薄手の器壁となっている。平行沈線の懸垂文が垂下し、地文は施文されない。底径8.7cm、現存高12.6cmを測る。3は張り出し部から出土したもので、無文の深鉢胴部である。

D区第14号住居跡（第396図～第400図）

D・E-18区に所在する。第40・49号住居跡、第32号土壇を切っており、第13・15号住居跡に切られる。調査の結果3軒の住居跡の切り合いであることが判

明、それぞれ第14A号・第14B号・第14C号と命名した。第14A号住居跡は3軒の住居跡のうち最も新しく、また最も西に位置している。一辺3.8mの隅丸方形を呈し、主軸はN-41°-Wを指す。壁高は12cmを測る。壁溝は床面上を1巡し、重複はみられない。北東部分にみられる重複は、第14B号住居跡との切り合いによるものであろう。炉跡は住居跡のほぼ中央に位置している。円形の地床炉で、直径75cm、深さ18cmを測る。北西端に1点のみ炉石を伴っている。この部分以外には炉石埋設の掘り方すら検出されなかったことから、燃焼部を取り囲む石囲炉のような構造は有していなかったものとみられる。

住居跡の南東部の壁溝に接して埋甕が存在する。住居の出入り口に相当する部分と思われるが、主軸線からやや西にずれて設置されている。底部を欠いた深鉢を正位に埋設したものである。掘り方は長径68cm、短径42cm、深さ45cmの不整楕円形のピットである。ピット底面は起伏を帯びており、土器はピット中央部に掘り残されたロームの高まりに下端を接する状態で埋設されていた。

床面上からは多数のピットが検出されたが、第14B号・第14C号に加えて第13号住居跡との切り合いも考慮するなら、本住居跡に伴う柱穴はおのずと限られるものと思われる。

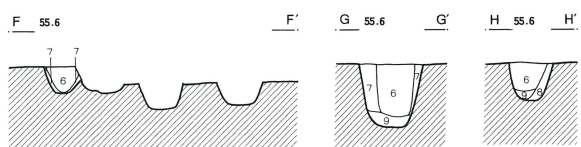
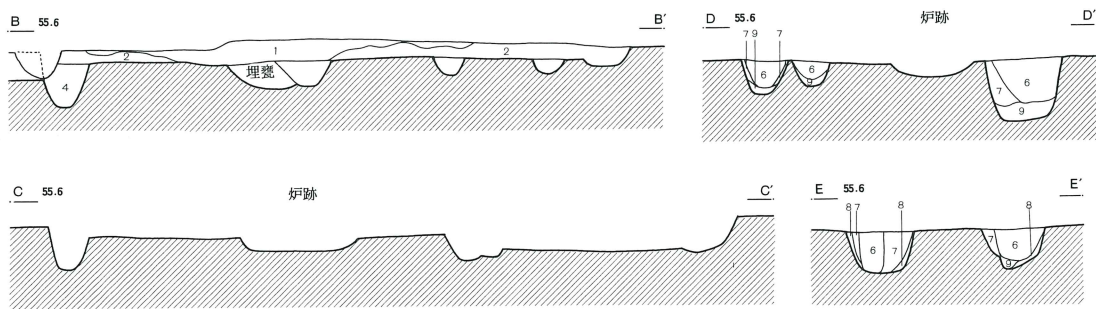
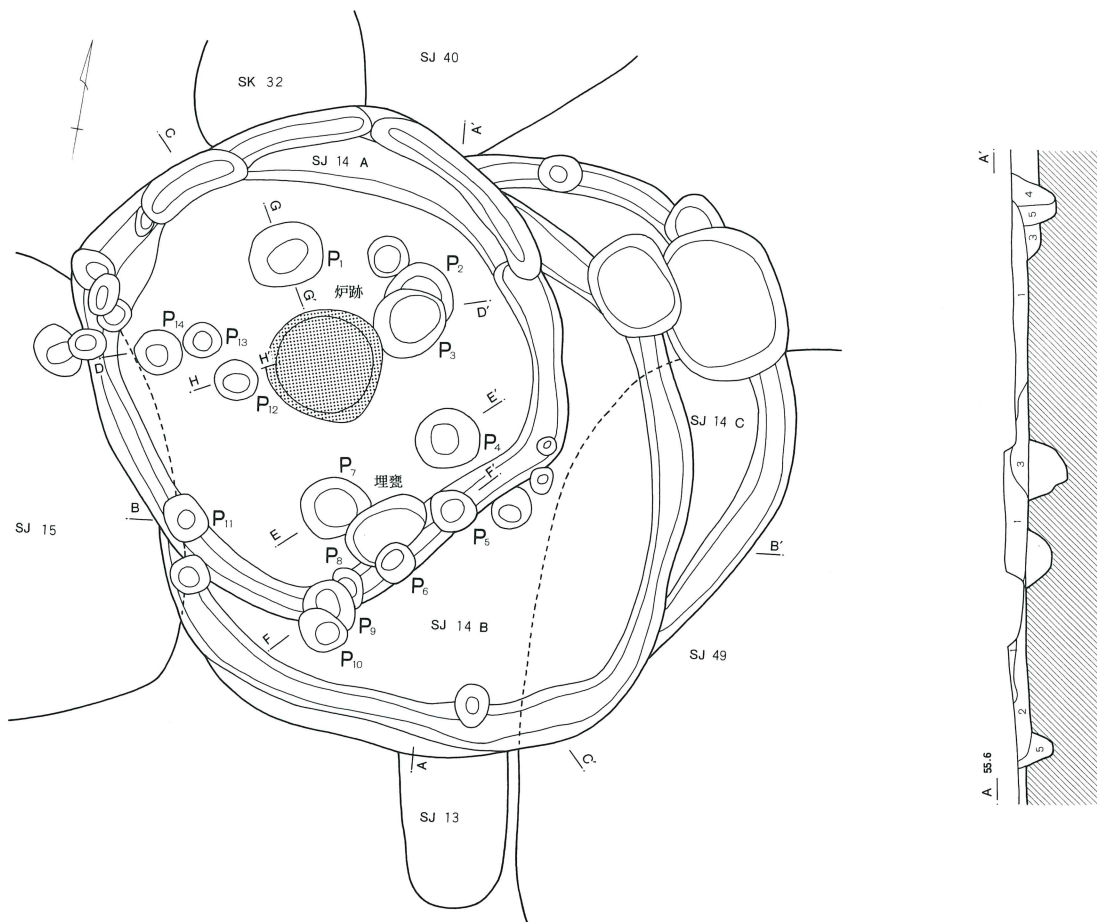
まず、埋甕をはさんで対峙する小ピットP5・6は住居の出入り口施設に伴うものであろう。P4・8は住居跡前面の対ピットであり、これに主軸線上奥壁部に位置するP1が対応して、3本柱穴を構成する。

P2・3は規模の上では前3者に類似するが、炉跡との距離的關係が不自然である。第13号住居跡の主軸線上にはほぼ相当し、また前段で述べた同住居跡の推定ラインがP2のすぐ北を通ることから、これを第13号住居跡奥壁のピットと考える方がすっきりする。

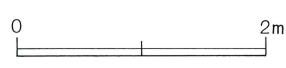
P9~13などの小ピットも第13号住居跡の推定ラインに沿って巡っており、これに属する壁柱穴である可能性が高い。

以上のように、本住居跡は中期末において顕著にな

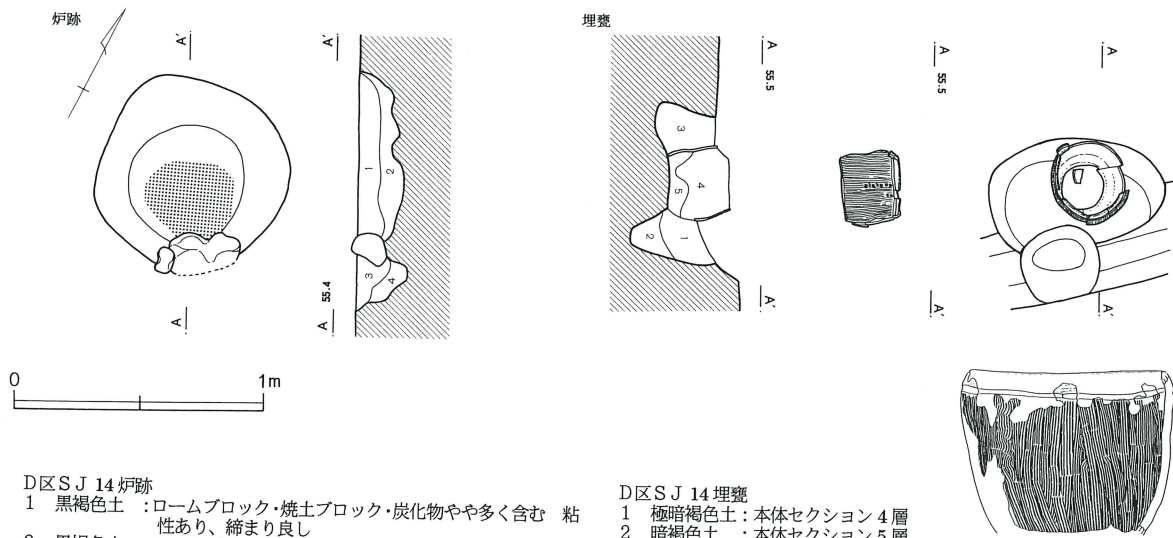
第396図 D区第14号住居跡



- D区S J 14
- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、炭化物少量含む粘性あり、締まりよし
 - 3 暗褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック若干、炭化物少量含む粘性あり、締まりよし
 - 4 極暗褐色土 : ロームブロック・焼土ブロック少量含む 粘性あり、締まりよし
 - 5 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
 - 6 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子やや多く、炭化物少量含む締まり強
 - 7 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多く、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり弱
 - 8 暗黄褐色土 : ロームブロック微量、炭化物少量含む 締まり強
 - 9 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まりやや強



第397図 D区第14号住居跡炉跡



D区SJ 14 炉跡

- 1 黒褐色土 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 2 黒褐色土 : ロームブロック・焼土ブロック多く含む 炭化物やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 3 黒褐色土 : ロームブロックやや多く、焼土ブロック若干、炭化物やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし

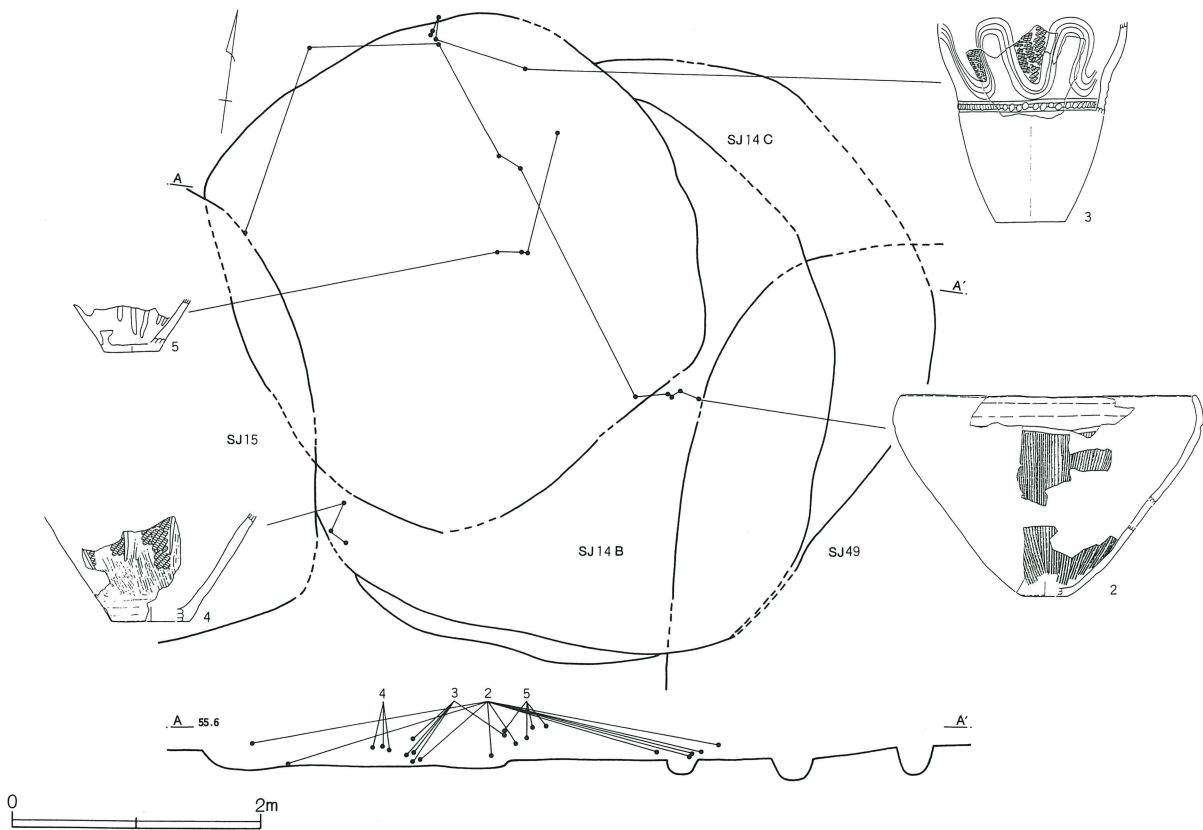
D区SJ 14 埋竈

- 1 極暗褐色土 : 本体セクション4層
- 2 暗褐色土 : 本体セクション5層 (以上、壁溝覆土)
- 3 極暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性あり、強く締まっている
- 4 極暗褐色土 : ロームブロック・炭化物若干含む 粘性あり、締まりよし
- 5 極暗褐色土 : ロームブロック多く、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし

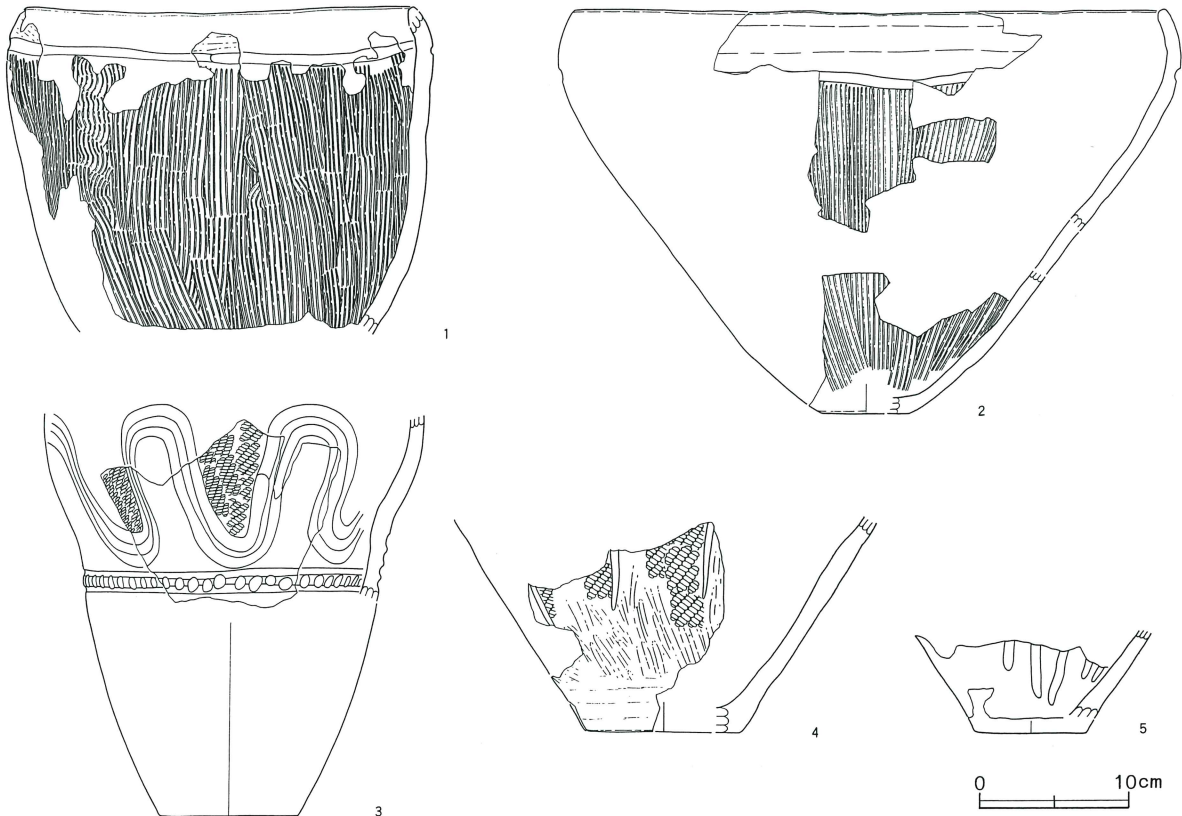
る3本柱の竪穴住居跡の典型例であり、埋甕ほかの出
土土器の時期もまたこれを裏付けるものである。

第14B号住居跡は3軒の住居跡群の中央に位置して
いる。第14A号に切られている。土層観察のうえでは

第398図 D区第14号住居跡遺物分布図



第399図 D区第14号住居跡出土土器(1)



第14C号に切られているが、壁溝の巡り方を見る限り、逆の切り合い関係も想定される。

直径4 m強の不整円形ないし隅丸方形を呈するものと考えられ、南の壁溝が直線的に巡る部分を住居跡前面と仮定するならば、主軸線はほぼ南北を示している。壁高は約12cmで、床面のレベルは第14A号住居跡とほぼ共通である。

床面はほぼ平坦である。壁溝は検出可能な範囲では床面をほぼ1巡する。炉跡は検出されなかったが、これは第14A号住居跡との切り合いによるものであろう。第14A号と関わる部分を除いては柱穴らしきピットは検出されなかった。

第14C号住居跡は3軒の住居跡群の最も西に位置している。壁溝の一部が検出されたのみで、規模・平面形などは不明である。

壁溝は検出可能な範囲では床面を1巡する。炉跡は検出されなかったが、これは切り合いによるものであろう。柱穴らしきピットは検出されなかった。

出土土器(第399図・第400図)

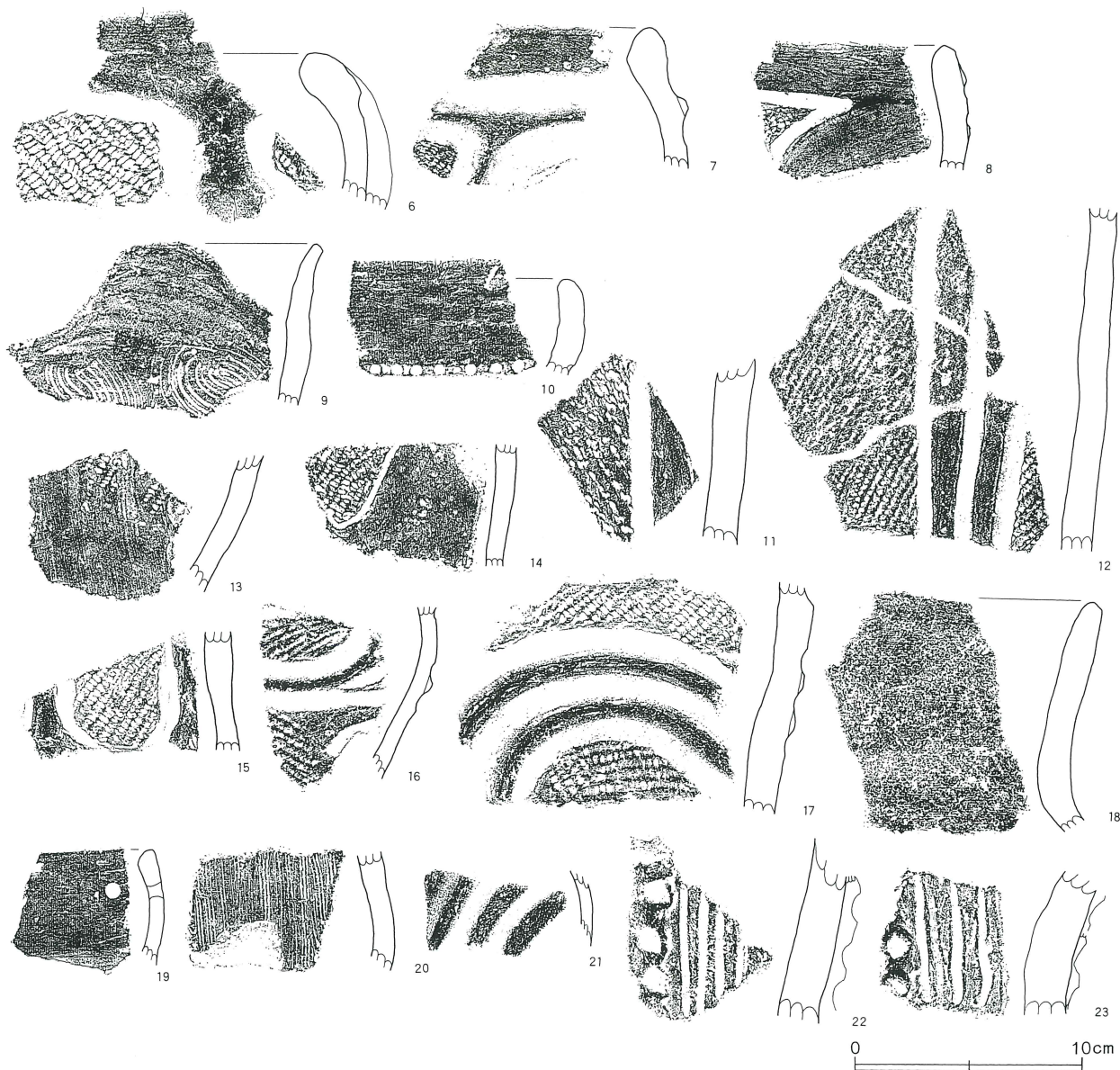
1は埋甕である。胴部中段にごく緩いくびれを持つが、全体に寸胴で、胴下半部から口縁部にかけて垂直に近い角度で立ち上がる。口端はわずかに内屈する。頸部に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具の条線が施文される。条線は基本的に縦位で施文されるが、数カ所で波状に垂下している。口径推定27cm、現存高20.4cmを測る。

2は浅鉢で、胴部中段を欠く2つの部分に分かれて出土した。底部から頸部まではほぼ直線的に開き、口縁内湾する。頸部に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具の条線が垂下する。

3は深鉢胴上半部である。胴部中段に平行沈線の区画が巡り、沈線間に列点文が施される。胴上半部には平行沈線で波状の区画が描かれ、区画から上のみRL単節縦位回転の縄文が充填施文される。磨消し連弧文の流れをくむ土器であろう。

4は深鉢底部から胴下半部である。磨消し懸垂文が

第400図 D区第14号住居跡出土土器(2)



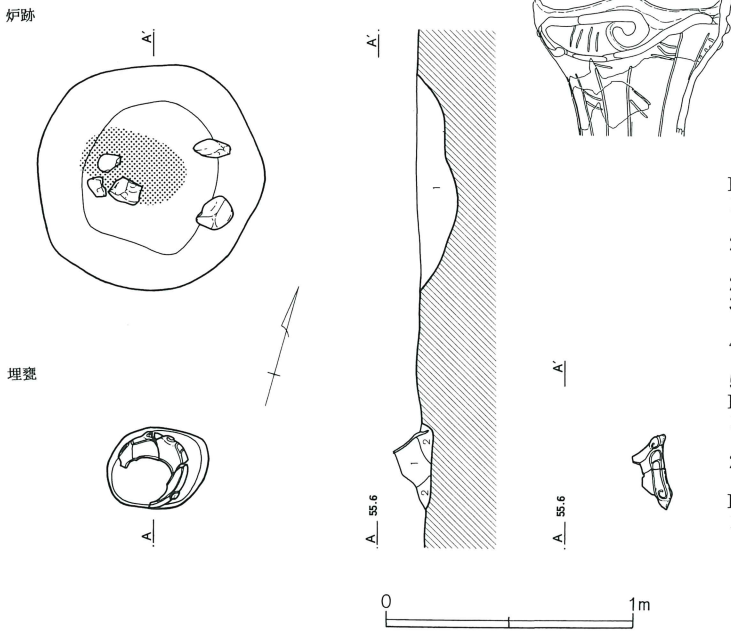
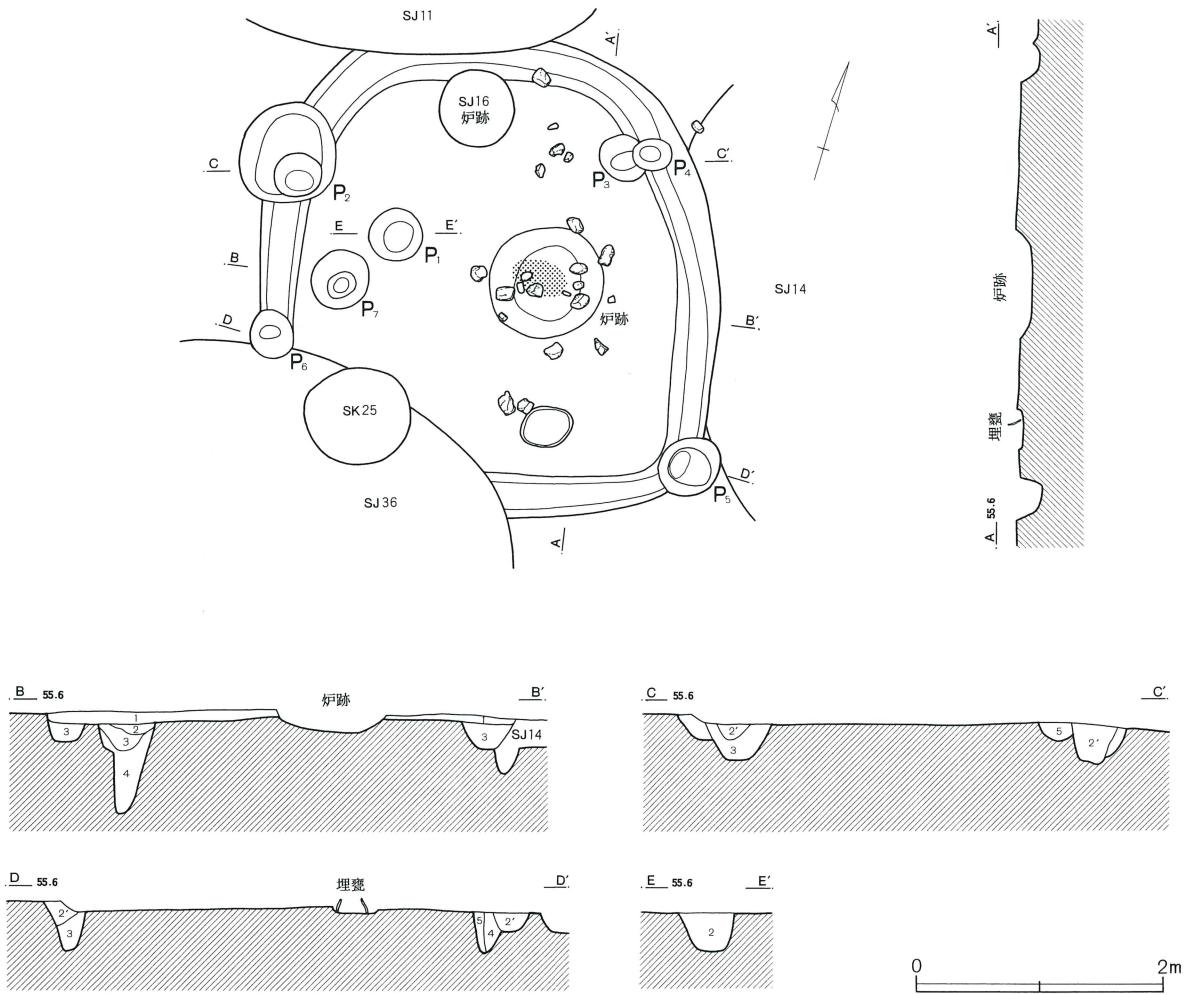
垂下し、RL単節縦位回転の縄文が施文される。底部付近では縦位の研磨調整が施され、底部周辺には横位のなでが加えられる。

5は深鉢底部である。平行沈線の懸垂文が垂下する。地文はみられない。6はキャリパー類深鉢口縁部である。地文はRL単節の縄文が横位回転で施文される。7は両側になぞりを加えた隆帯で渦巻文が描かれる梶山類の口縁部であろう。8は微隆起線による玉抱き文が描かれる口縁部であろう。9は台形の突起が付される口縁部である。口縁部文様帯は存在せず、櫛歯状工具による波状の条線が垂下する。10は水平口縁で、口縁

下に1条の沈線が巡り、沈線内部に円形の刺突列が巡る。11・12は磨消し懸垂文である。13は地文縄文上に櫛歯状工具の条線が垂下する。14は鋸歯状の磨消しモチーフであろう。15は玉抱きモチーフの一部であろう。

16は両耳壺の胴上半部である。17は深鉢胴上半部で、なぞりを伴う二本隆帯の渦巻文である。18は両耳壺の口縁部から頸部である。19は浅鉢口縁部で、いわゆる補修孔とみられる貫通孔を有する。20は条線のみ胴部、21は凹線の渦巻文で、広口壺ないしひさご形土器である。22・23は曾利系の隆帯文土器であろう。

第401図 D区第15号住居跡



D区S J 15

- 1 暗褐色土：ロームブロック若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土：ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 2' 暗褐色土：1に似るがロームブロック粒径大きい
- 3 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗黄褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 5 暗褐色土：1層に似る

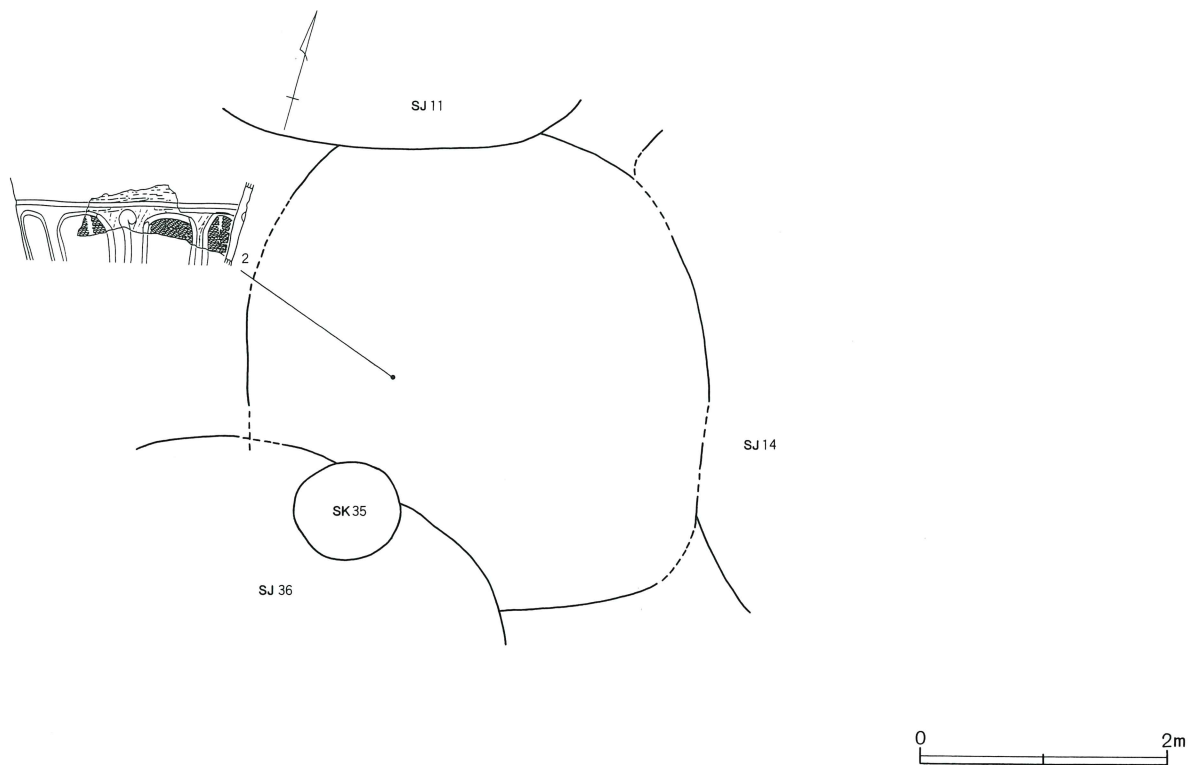
D区S J 15埋壺

- 1 暗褐色土：ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし

D区S J 15炉跡

- 1 暗褐色土：焼土ブロック若干、ロームブロック少量、炭化物極少量含む 粘性欠き、堅く締まっている

第402図 D区第15号住居跡遺物分布図



D区第15号住居跡（第401図～第404図）

D-17・18区に所在する。第14号住居跡を切っており、第11・16・36号住居跡、第25号土壇に切られる。径3.8mの隅丸方形ないし台形の住居跡で、壁高は残りの良い部分でも10cm程度である。主軸方向はN-17

°-Wを指す。壁溝は床面上を1巡する。床面はわずかな起伏を帯びており、北に向かって傾斜している。炉跡は住居跡中央から若干東に寄った地点に位置する。不整形形の地床炉で、直径90cm、深さ14cmを測る。覆土中に若干の礫を検出したが、炉石ではない。炉跡

第403図 D区第15号住居跡出土土器（1）



第404図 D区第15号住居跡出土土器(2)



の南南東に埋甕が存在する。深鉢を逆位に埋設したものである。掘り方は長径42cm、短径32cm、深さ4cmの不整楕円形のピットである。土器はピット底面からわずかに浮いており、床面上に半ば露出する。

本住居跡の炉跡と埋甕の配置は、住居跡の主軸に平行しつつ50cmほど東にずれて設定されている。

床面上から7本のピットが検出された。深さは28～70cmとさまざまである。配置に規則性は認められず、壁溝と重複するものも多いため、本住居跡の柱穴配置は不明である。

住居跡の床面上に若干の礫の集積がみられた。配置に規則性はみられない。柄鏡形住居跡の周礫帯に相当するものと思われる。遺物は縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。

出土土器(第403図・第404図)

1は埋甕である。キャリパー類深鉢で、胴下半部を欠失する。4単位の波状口縁である。口縁下に幅広の

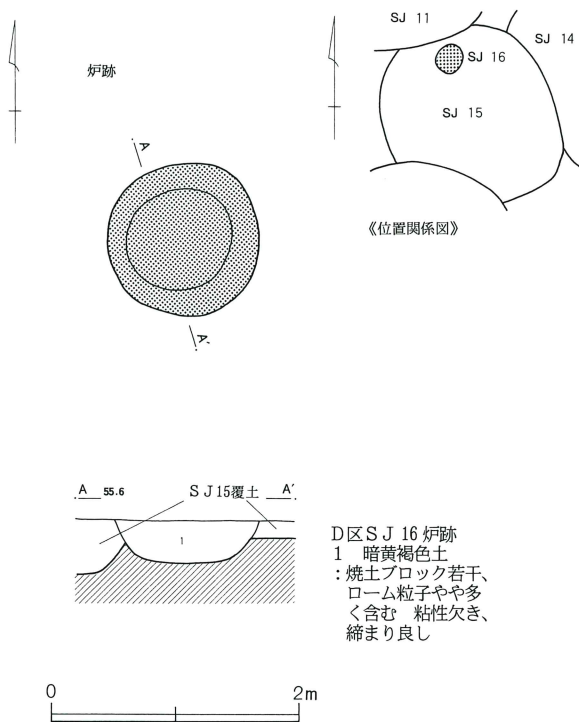
沈線で入り組み状の渦巻文を描き、胴部には平行沈線の懸垂文が垂下する。地文は棒状工具による淡い集合沈線で、口縁部では縦位、胴部では右下がりに施文される。口縁部文様帯下端の区画は部分的にしか存在せず、区画の欠落する部分では胴部の懸垂文が口縁部近くまで侵入するなど、文様分帯の意識はかなり希薄になっている。口径25cm、現存高21.7cmを測る。

2は住居跡西部の床面直上で出土したもので、深鉢胴部中段である。横位の沈線で器面を上下に分帯し、胴下半部に逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。

3・4はキャリパー類の口縁部である。3は波状口縁で、口縁下に入り組み状の渦巻文が描かれる。4は沈線による区画のみで地文がみられない。5は逆U字の磨消しモチーフが描かれ、無文部にわらび手状の沈線が垂下する。6は平行沈線の懸垂文間に矢羽根状の集合沈線が描かれる胴部である。

7は連弧文系の深鉢口縁部であろう。口縁下に3本

第405図 D区第16号住居跡



の平行沈線が巡り、地文は縦位の集合沈線である。8は深鉢胴部中段の区画である。1条の沈線に沿って円形刺突が巡る。胴下半部には逆U字の沈線区画が描かれる。地文は縦位の集合沈線である。9は両耳壺胴上半部の文様帯、11は橋梁状の把手で、背面にわらび手状の沈線が描かれる。12は台付き土器の器台部分である。

D区第16号住居跡（第405図）

D-18区に所在する。第15号住居跡覆土中に炉跡だけを検出した。炉跡は不整円形の地床炉で、直径60cm、深さ14cmを測る。壁・壁溝は検出されず、炉跡に対応する柱穴も特定できなかったため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向は不明である。

炉跡検出面と第15号住居跡床面との比高差は約6cmである。炉跡の底面は同住居跡床面を8cm余り掘り抜いている。本住居跡に伴う遺物は出土していない。

D区第17号住居跡（第406図～第408図）

E-19区に所在する。第19・20号住居跡に切られる。長径5.9m、短径4.8mの長楕円形で、N-23°-Wを指し、壁高は7cmを測る。壁溝は床面上を1巡し、重複

はみられない。床面はほぼ平坦である。

炉跡は主軸線上わずかに北に寄った地点に位置している。胴下半部を欠いた深鉢を正位に埋設した埋甕炉である。土器埋設の掘り方は長径67cm、短径62cmの楕円形で、深さは21cmを測る。底面は被熱により赤化し、凹凸が激しい。

炉体土器は掘り方の底面に下端を接して埋設されている。口縁部は床面上に若干露出していたものとみられ、口縁から胴上半部の一部が破壊を受けている。

床面上からは7本のピットが検出された。主軸線南端から検出されたP1・P2などの小ピットは入り口の施設に伴うものであろう。P3～5は深さ25～30cm、直径に比べ掘り込みが浅く、住居跡の柱穴としては物足りない。いずれにせよこれらのピットの配置に規則性は認められず、本住居跡の柱穴配置は不明である。

遺物は前述の埋甕の他に縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土している。

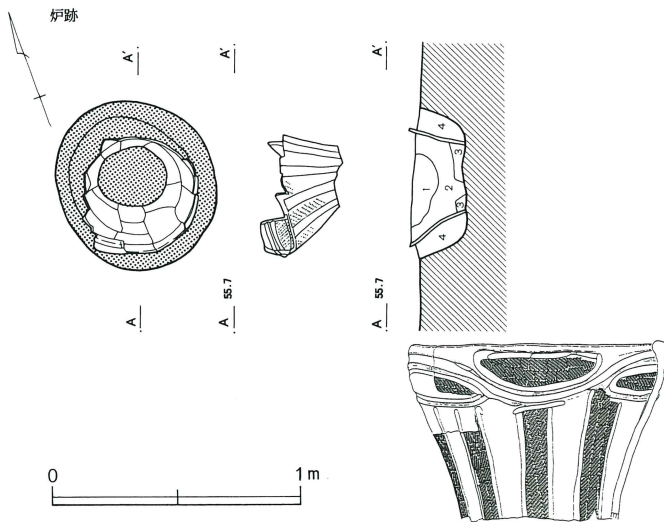
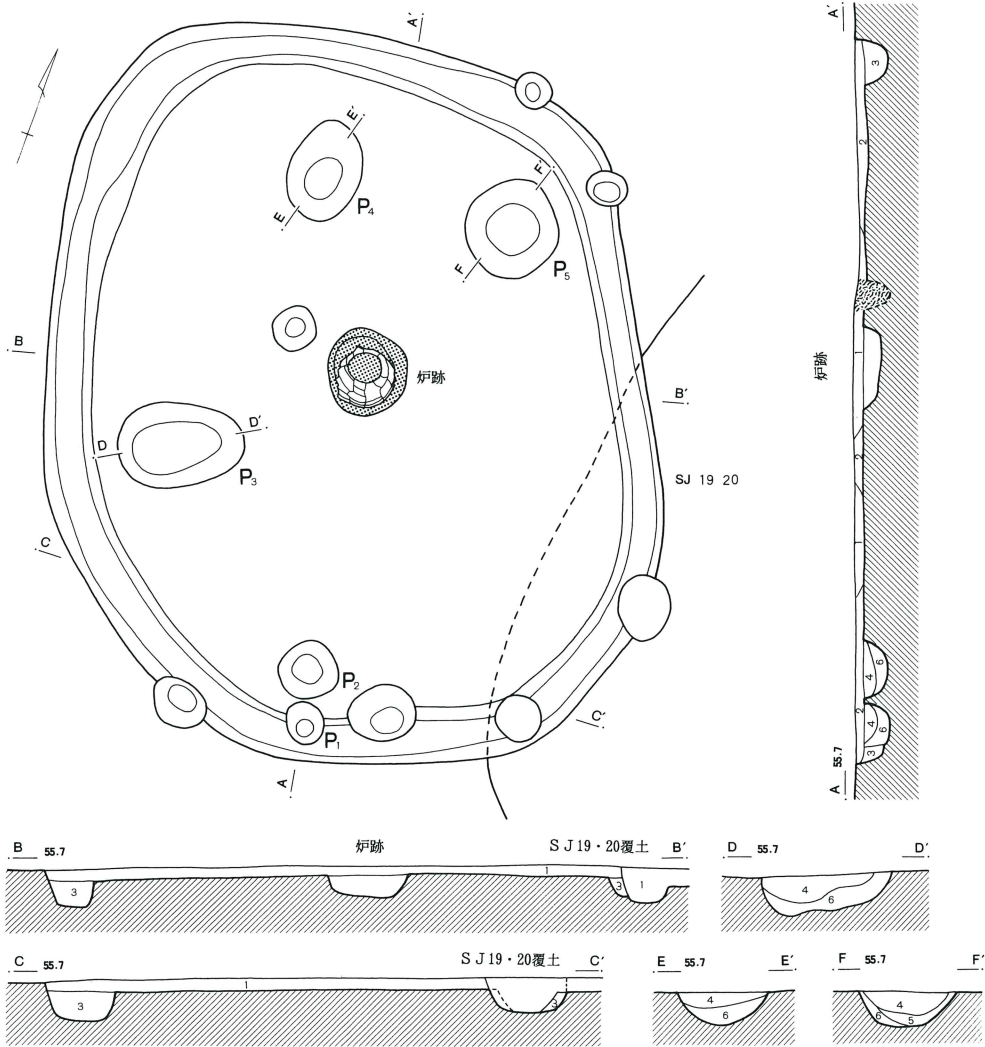
出土土器（第407図・第408図）

1は炉体土器である。キャリパー類の深鉢で、胴部中段から下を欠くほか、口縁部から胴上半部の一部を欠失する。水平口縁で、口縁下には凹線のなぞりを伴う2本一組の隆帯が波状に巡り、上下に楕円形の区画が構成される。口縁部と胴部の境は1状の隆帯によって区画される。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位回転で施文される。口径44cm、現存高31.8cmを測る。

2・3はキャリパー類深鉢口縁部である。2は波状口縁の波頂部に付される山形の突起、3は水平口縁で口端内面に隆帯が巡る。4はキャリパー類の頸部付近の破片で、口縁部文様帯下端を区画する隆帯がみられる。胴部には磨消し懸垂文が垂下し、地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。

5は梶山類の口縁部である。水平口縁で、口縁下に1条の隆帯が巡り、上下に凹線のなぞりが加えられる。胴上半部には2本一組の微隆起線によって大柄の渦巻

第406図 D区第17号住居跡



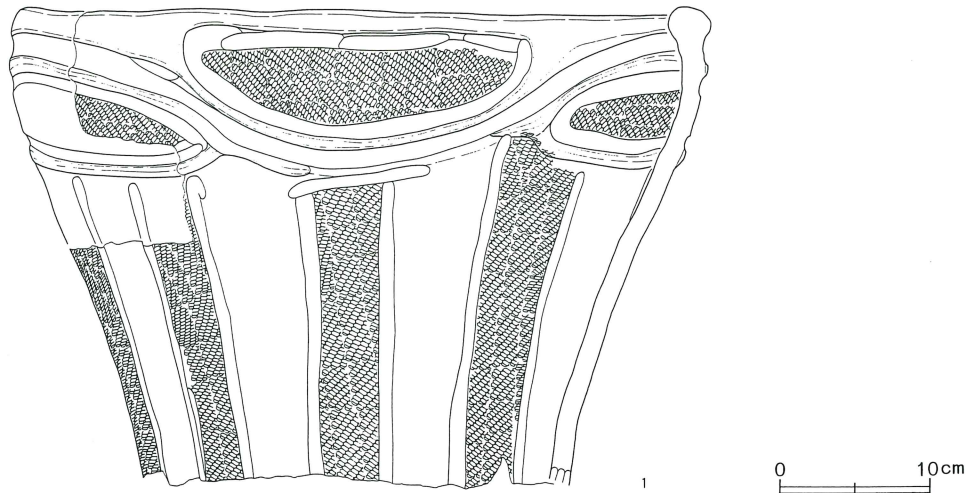
D区S J 17

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量含む 粘性あり、縮まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子やや多く、炭化物少量含む 粘性あり、縮まりよし
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、縮まりよし
- 4 黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性あり、縮まりよし
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多く含む 粘性あり、縮まりよし
- 6 黄褐色土 : 黒色土少量含む 埋め戻しローム 粘性欠き、縮まりあり

D区S J 17 炉跡

- 1 極暗褐色土 : ロームブロック若干、炭化物極少量含む 粘性あり、縮まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、炭化物若干、焼土粒子少量含む 粘性あり、縮まりよし
- 3 黄褐色土 : 黒色土少量含む 埋め戻しローム 粘性欠き、堅く縮まっている
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、縮まりよし

第407図 D区第17号住居跡出土土器(1)



文が描かれる。地文はLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文されるほか、口縁下の隆帯上にも横位回転で施文される。

6は縦位の平行沈線間にわらび手状の沈線が垂下するものである。吉井城山類の胴部であろう。7は逆U字状の沈線区画が描かれる。地文はLR単節縦位回転の縄文である。8～15は磨消し懸垂文である。

16は2本隆帯の懸垂文が垂下する胴部である。17は曾利形の口縁部である。口端肥厚しつつ内湾し、縦位の平行沈線が垂下する。

18は浅鉢口縁部と思われるものである。口縁下に1条の沈線が巡り、地文として半裁竹管状工具による縦位の条線が描かれる。

19は曾利系の深鉢胴部中段の破片である。横位の隆帯が巡り、隆帯上面には円形の刺突列を伴っている。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

20は唐草文系の土器である。一本隆帯の渦巻文が描かれ、地文は棒状工具の平行沈線がモチーフに沿って放射状に充填施文される。21は櫛歯状工具による縦位の条線が施文される深鉢口縁部である。22～24は同様の条線が描かれる破片で、24は口縁部付近の破片で、胴部との境を区画する横位の沈線が観察される。

25は両耳壺の口縁部である。26は両耳壺の肩部で、キャリパー類の深鉢口縁部に由来する文様帯が描かれる。隆帯渦巻文の上には山形の突起が付されるものと

思われる。

D区第18号住居跡(第409図～第412図)

E-18・19区に所在する。南半部を第21・22号住居跡に切られる。隅丸の六角形を呈する住居跡であると思われ、長径は不明、短径は4.9mを測る。主軸方向はN-10°-Eを指す。

壁高は残りの良い部分でも5cm程度である。壁溝は南東壁を除いて1巡しており、重複はみられない。床面はほぼ平坦で、東側でわずかに低くなっている。切り合い関係にある第21号住居跡床面との比高差は約13cmである。

炉跡は床面中央からやや南西に寄った地点に位置する。2個体の土器を組み合わせた埋甕炉で、南半部分を攪乱によって破壊されている。正位に埋設された深鉢の周囲を別個体の深鉢の大型破片によって囲う構成である。土器は全体の半分近くが床面上に露出した状態であった。

炉跡の掘り方は円形平底のピットである。直径56cm、深さ20cmを測る。土器は掘り方底面からわずかに浮いた状態で埋設されていた。掘り方内部の埋土にも多量の焼土が含まれており、この炉跡は土器埋設以前にも地床炉など別の状態で機能していた可能性がある。

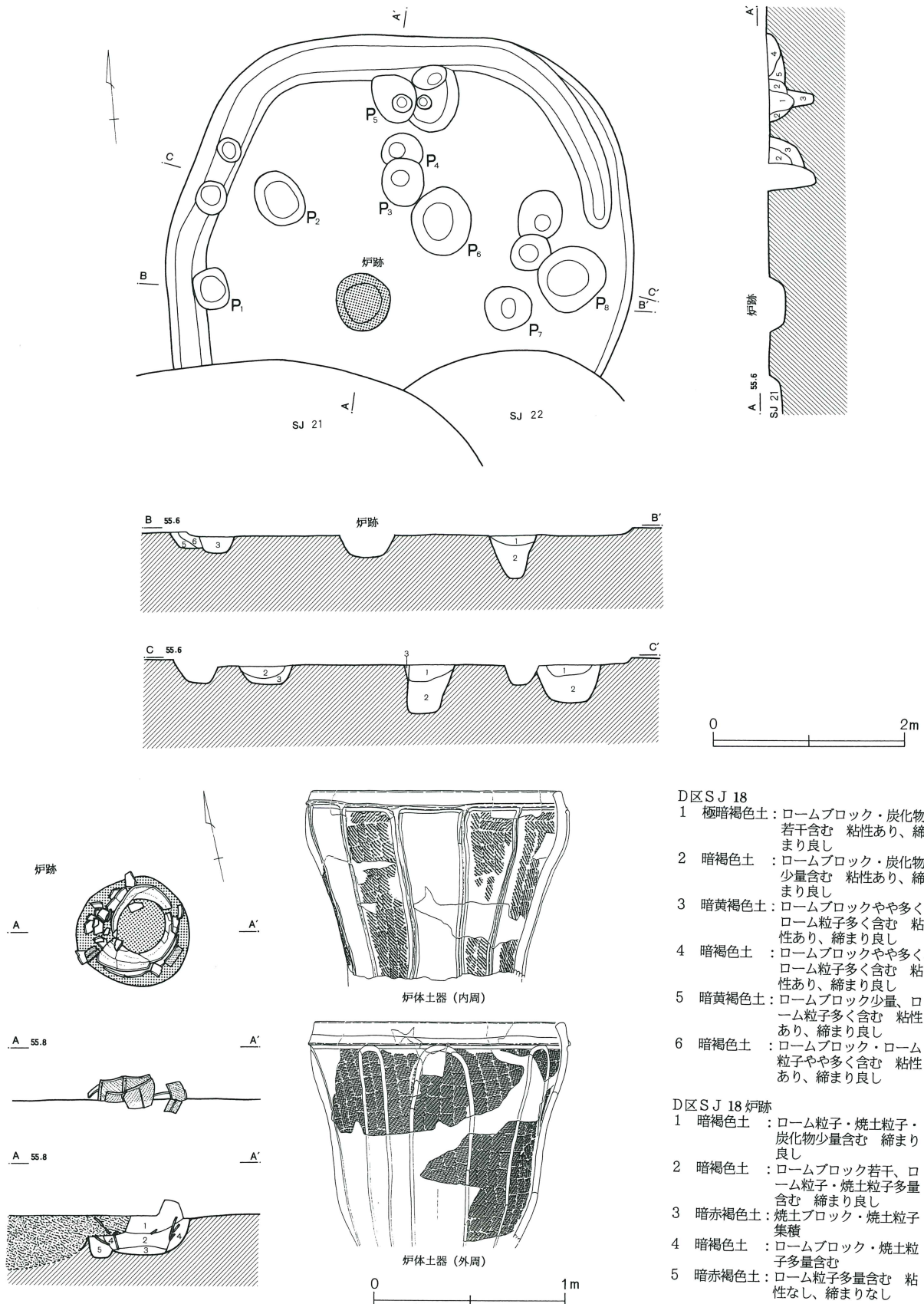
炉跡外周の土器の破片の一部が住居跡南東部の床面上でまとまって出土した。これが住居廃絶に伴う何らかの行為によるものか、単なる攪乱による移動である

第408图 D区第17号住居迹出土土器(2)



0 10cm

第409図 D区第18号住居跡



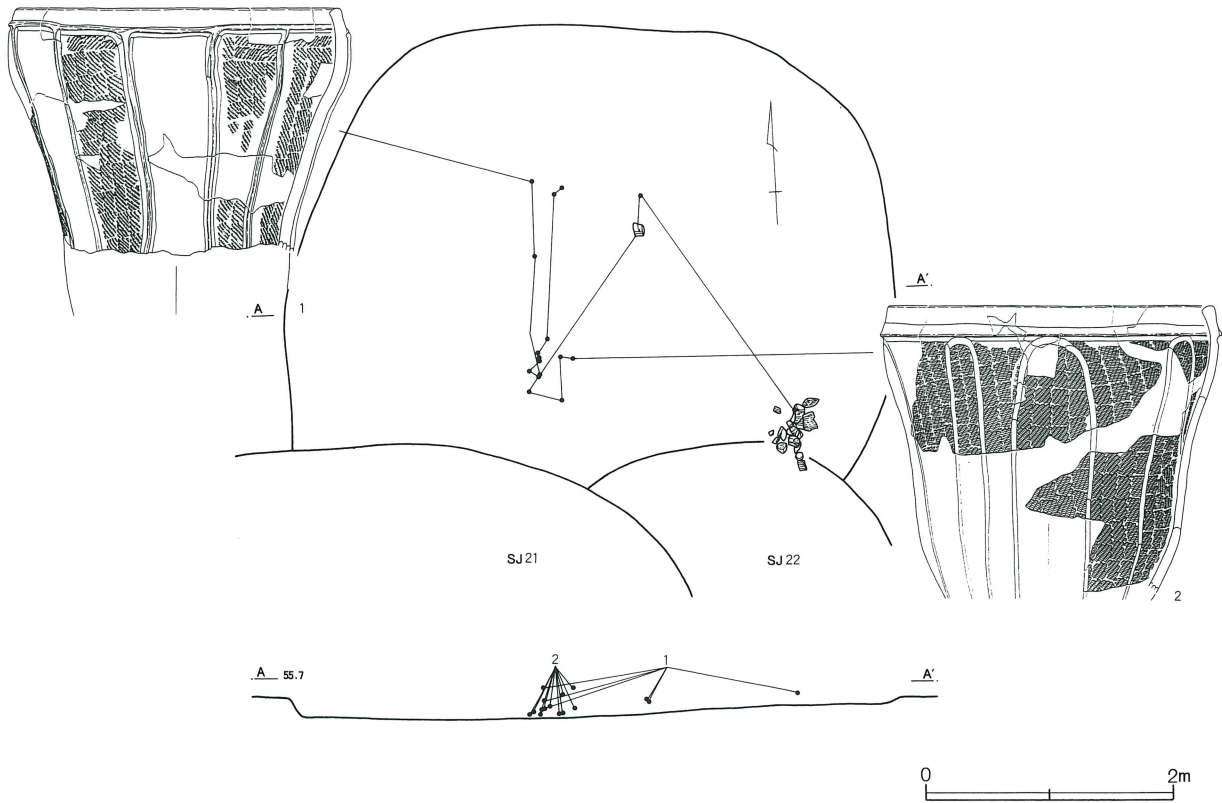
D区SJ 18

- 1 極暗褐色土 : ロームブロック・炭化物若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 6 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし

D区SJ 18 炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む 締まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子・焼土粒子多量含む 締まりよし
- 3 暗赤褐色土 : 焼土ブロック・焼土粒子集積
- 4 暗褐色土 : ロームブロック・焼土粒子多量含む
- 5 暗赤褐色土 : ローム粒子多量含む 粘性なし、締まりなし

第410図 D区第18号住居跡遺物分布図



かは明らかにできなかった。

床面上から十数本のピットが検出された。これらのうち図中P 3～8が柱穴と思われるものである。深さは34～52cmを測る。ただし、全てを単独の住居跡に伴うものとするには密度の点で不自然であり、本住居跡北東壁付近に中心を持つ別個の遺構が存在した可能性もある。本住居跡の柱穴配置は不明である。

遺物は縄文時代中期末葉の土器が出土している。

出土土器（第411図・第412図）

1は埋甕内周の土器である。水平口縁の深鉢で、胴部中段から下を欠失する。胴部中段にくびれを持ち、頸部にかけては直線的に開く。口縁部は軽微に張り出しつつ内湾する。口唇部に顕著な肥厚はみられないが、全体の造作は明らかにキャリパー類深鉢のものである。口縁下に断面台形の隆帯が巡り、ここを起点として胴部に一本隆帯の懸垂文が垂下する。隆帯の両側には幅広の凹線によるなぞりが加えられる。

懸垂文間は概ね1区画おきに無文化しており、磨消し懸垂文に類似の構成となっている。地文はL無節の

縄文で、口縁の区画直下では横位回転、それ以外では縦位回転で施文される。口径42cm、現存高32.4cmを測る。

2は埋甕外周の土器である。水平口縁の深鉢で、胴下半部を欠失する。口縁は肥厚しつつ内湾し、胴部中段に緩いくびれを持つが、1と比べて寸胴である。

口縁下に断面三角形の隆帯が巡り、以下にRL単節縦位回転の縄文が施文される。胴部には逆U字状の沈線モチーフが描かれる。磨消し等は特に加えられない。口径42cm、現存高33cmを測る。

3～6はキャリパー類深鉢の口縁部である。3は緩やかな波状口縁、そのほかは水平口縁である。隆帯による渦巻文が描かれ、胴部との境は1条の沈線によって区画される。6の胴部には幅広の磨消し懸垂文が垂下する。

7は平行沈線、8は単沈線により逆U字状のモチーフが描かれる口縁部である。9は口縁直下に1条の沈線が巡る。

10は口端直下に断面三角形の隆帯が巡る。胴部には

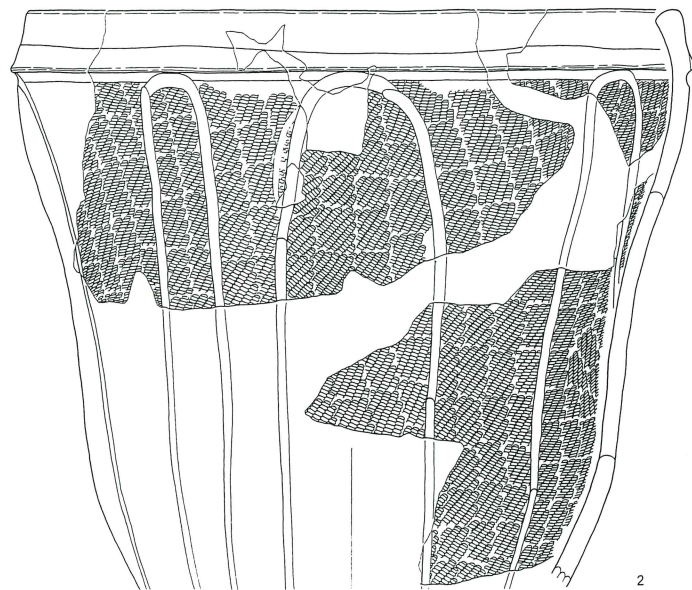
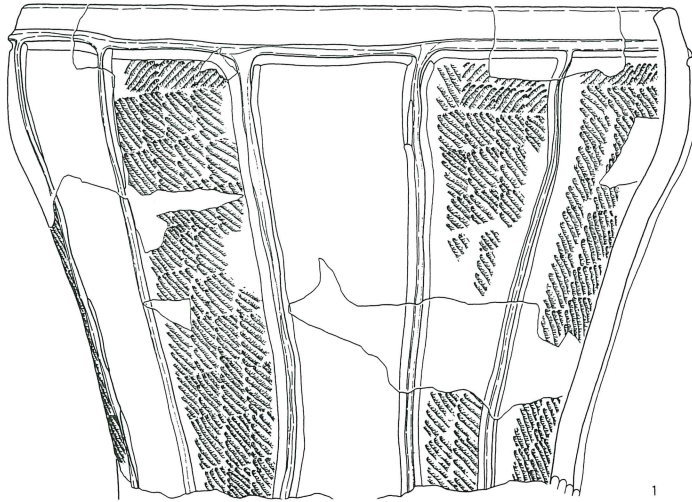
2本一組の微隆起線により逆U字モチーフが描かれる。11は胴部中段に刺突列が巡り、胴下半部に逆U字の磨消しモチーフが描かれる。12・14～17は磨消し懸垂文の胴部である。

17は幅広の平行沈線が垂下する胴部である。地文はRL単節縦位回転の縄文である。2の復元個体に類似

するが、比較的薄手の器壁である。

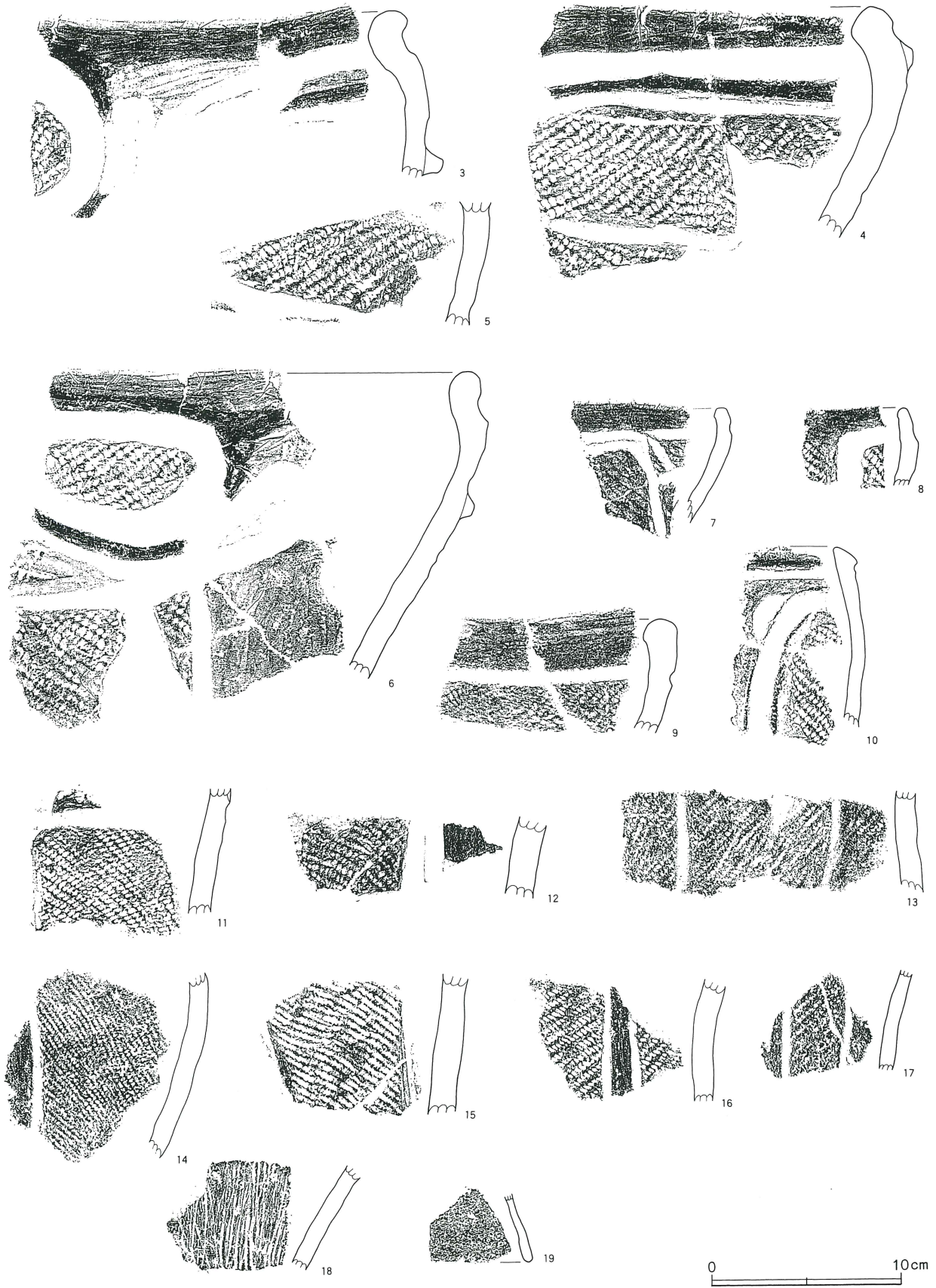
18は縦位の条線が施文される破片で、両耳壺の胴下半部であろう。19は台付き土器の脚台部と思われるものである。非常に薄手の器壁で外面は無文、内面には輪積み痕を残している。

第411図 D区第18号住居跡出土土器(1)

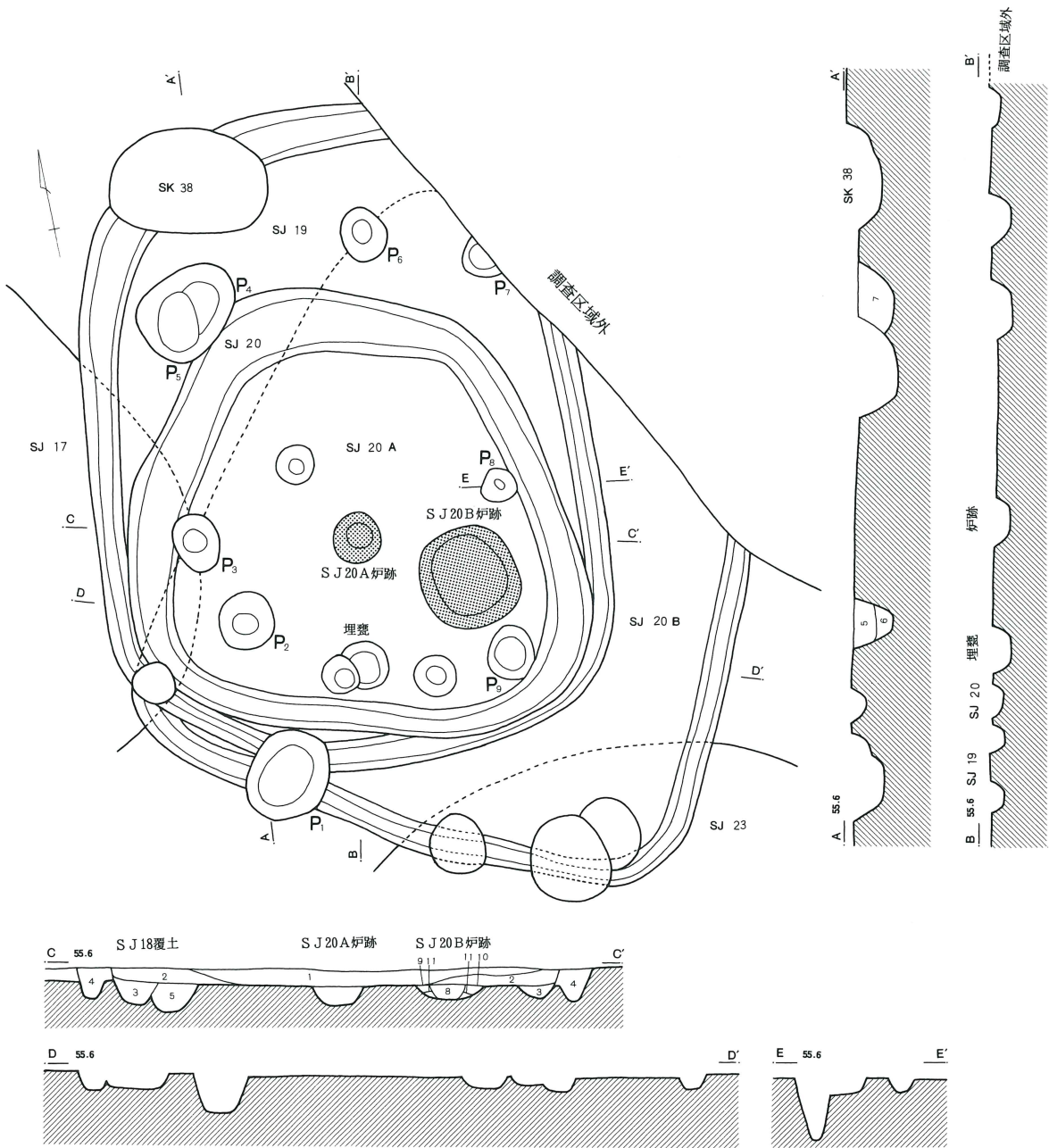


0 10cm

第412图 D区第18号住居跡出土土器(2)



第413図 D区第19・20A・20B号住居跡



D区S J 19、20 A・B

- 1 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まり強
- 4 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 5 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 7 明黄褐色土 : 黒色土少量含む 粘性あり、締まりよし

D区S J 20 B 炉跡

- 8 極暗褐色土 : ロームブロックやや多く、焼土ブロック・炭化物若干含む 粘性欠き、締まりよし
- 9 暗褐色土 : ロームブロック若干、炭化物極少量含む 粘性欠き、締まりよし
- 10 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 粘性欠き、締まりよし
- 11 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く、ローム粒子若干含む 粘性欠き、強く締まっている



D区第19・20A・20B号住居跡(第413図～第417図)

E・F-19区に所在する。調査区壁際で3軒重複した状態で検出し、範囲の確定した順に第19号・第20A号・第20B号と命名した。但し新旧関係はこの順序ではなく、第20B号→第19号→第20A号の順に新しくなるものと思われる。

D区第19号住居跡

北東部の一角が調査区域外に存在する。第17号住居跡・第20B号住居跡を切っており、第20A号住居跡・第38号土壇に切られる。

長径6m、短径4.5mの隅丸長方形の住居跡で、主軸はN-10°-Eを指す。壁高は南部では10cmを測るが、北壁はほとんど残っていない。

壁溝は1巡し、重複はみられない。炉跡は検出されなかった。床面上から4本のピットが検出された。住居跡の北東コーナーに1本、北西コーナーに切り合った状態で2本、北壁中央付近に1本がそれぞれ配されている。床面南半部分の状況は第20A号との切り合い

によって確認できない。

北壁側の壁溝埋土中から若干の土器片を出土している。大半が縄文時代中期末葉の土器片である。

出土土器(第414図)

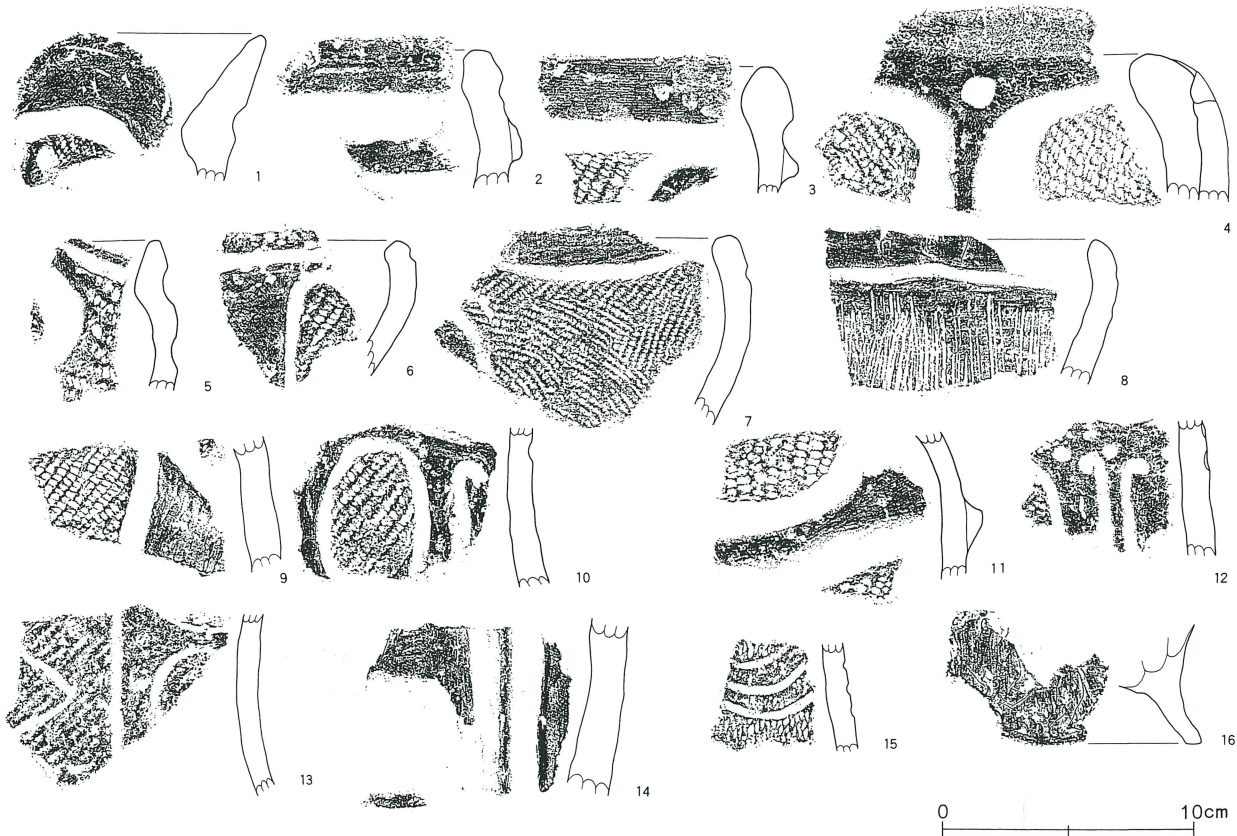
1～4はキャリパー類深鉢の口縁部である。1は波状口縁の波頂部で、山形の突起が付され、幅広の沈線で渦巻き文が描かれる。地文はRL単節の縄文である。

2～3は水平口縁である。隆帯+沈線によって渦巻き文が描かれる。4は隆帯の交点に円形の刺突がみられる。

5は波状口縁で、口端直下に1条の沈線が巡る。6・7は口縁下に1条の沈線が巡り、胴上半部に波状の沈線が巡るが、両者の間では縄文部と無文部の関係が正反対になっている。

8は浅鉢の口縁部と思われる。水平口縁で口縁下に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が垂下する。9・10・12・13は磨消し縄文の胴部である。

第414図 D区第19号住居跡出土土器



10は楕円形モチーフの間にわらび手状の沈線が垂下する。12は棒状工具先端による円形の刺突とU字状の沈線文が描かれる。13は磨消し懸垂文から変化したH字文で、縄文部に単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。11は両耳壺胴上半部の文様帯である。

15は連弧文土器の胴部で、覆土中への混入であろう。16は台付き深鉢の脚台部である。

D区第20A号住居跡

第17・19・20B号住居跡を切っている。直径4.2m、南に向かって開く隅丸台形を呈する。壁高は15cmで、床面のレベルは第19号住居跡より約5cm深く、第20B号住居跡とはほぼ共有している。壁溝は床面上を1巡している。

炉跡は主軸線上の、住居跡中央からわずかに南寄りに位置している。深鉢胴上半部を正位に埋設した埋甕炉である。

土器埋設のための掘り方は直径48cm、深さ22cmの円形のピットである。土器は掘り方底面から約18cm浮いており、大部分が床面上に露出した状態で埋設されていた。

主軸線上の南壁寄りでは埋甕を検出した。ほぼ完形の深鉢を正位に、口縁側をわずかに炉跡方向へと傾けて埋設したもので、炉跡からの距離は約70cmである。掘り方は直径38cm、深さ20cmの円形のピットである。土器は掘り方底面から約4cm浮いた状態で埋設されていた。この埋設土器も胴上半部を床面上に露出した状態で埋設されていた。

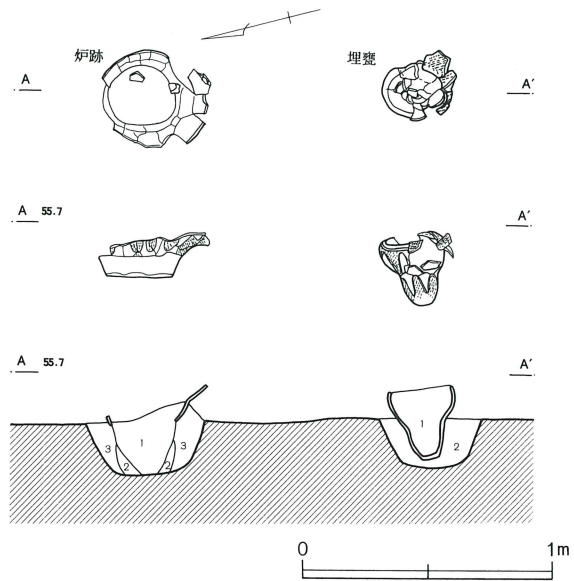
床面上から6本のピットが検出された。深さは10～42cmで、配置に規則性はみられない。

遺物は前述の炉体土器・埋甕の他に中期末葉の土器片が出土している。

出土土器（第416図・第417図）

1は炉体土器である。深鉢で、口縁部および胴部中段から下を欠失する。胴部中段の無文部を境として文様帯が上下に分帯され、胴上半部には玉抱き文ないしJ字文、胴下半部には逆U字の磨消しモチーフが描かれる。

第415図 D区第20A号住居跡埋甕



D区S J 20 A埋甕

- 1 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多く含む 締まり強

D区S J 20 A炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 2 褐色土 : ロームブロック少量含む 締まり強
- 3 暗褐色土 : ロームブロック・焼土粒子少量含む 締まり強

2は埋甕である。口縁直下に1条の沈線が巡り、胴上半部に波状、胴下半部に逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。口径21cm、器高31.2cmを測る。

3～6はキャリパー類の口縁部である。3は隆帯上に縦S字状の沈線が描かれる。7は逆U字状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。8はJ字文である。10～12は磨消し懸垂文である。13はU字状の磨消しモチーフが上下に対向する胴部中段の破片である。

15・17・18は梶山類の胴部で、凹線のなぞりを伴う二本隆帯で曲線文様が描かれる。14・17は微隆起線文の土器である。

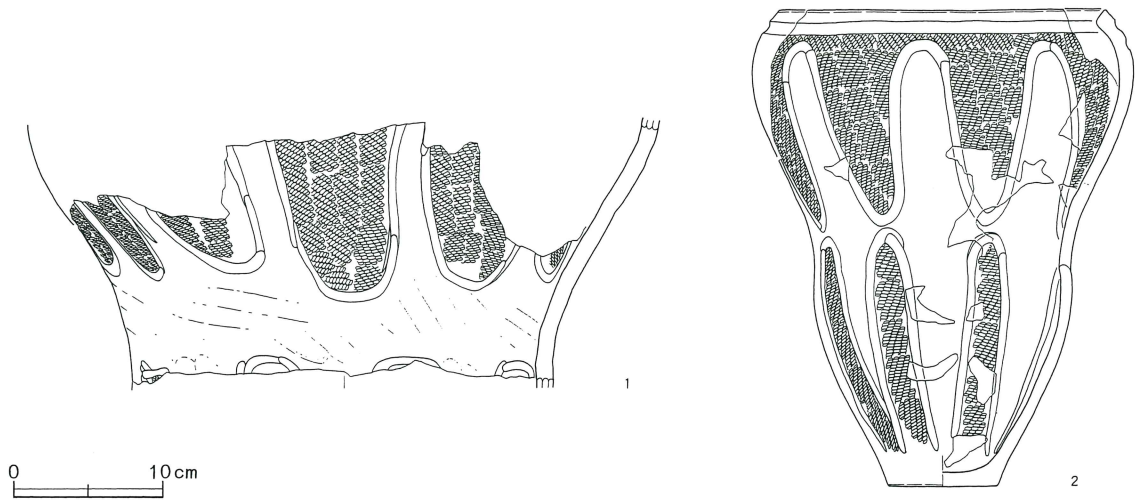
19・20は地文条線の浅鉢であろう。21は曾利系の隆帯文土器で、円形刺突を伴う隆帯が巡る。22は篋状工具の押し引き文が2段に巡る胴部である。

D区第20B号住居跡

北東部分は調査区域外に存在する。第20A号住居跡に切られ、第19号住居跡にも切られるものとみられる。

隅丸長方形ないし台形を呈する住居跡であると思われる。長径は不明、短径は約5mを測る。主軸方向はN

第416図 D区第20A号住居跡出土土器(1)



-31°-Eを指す。

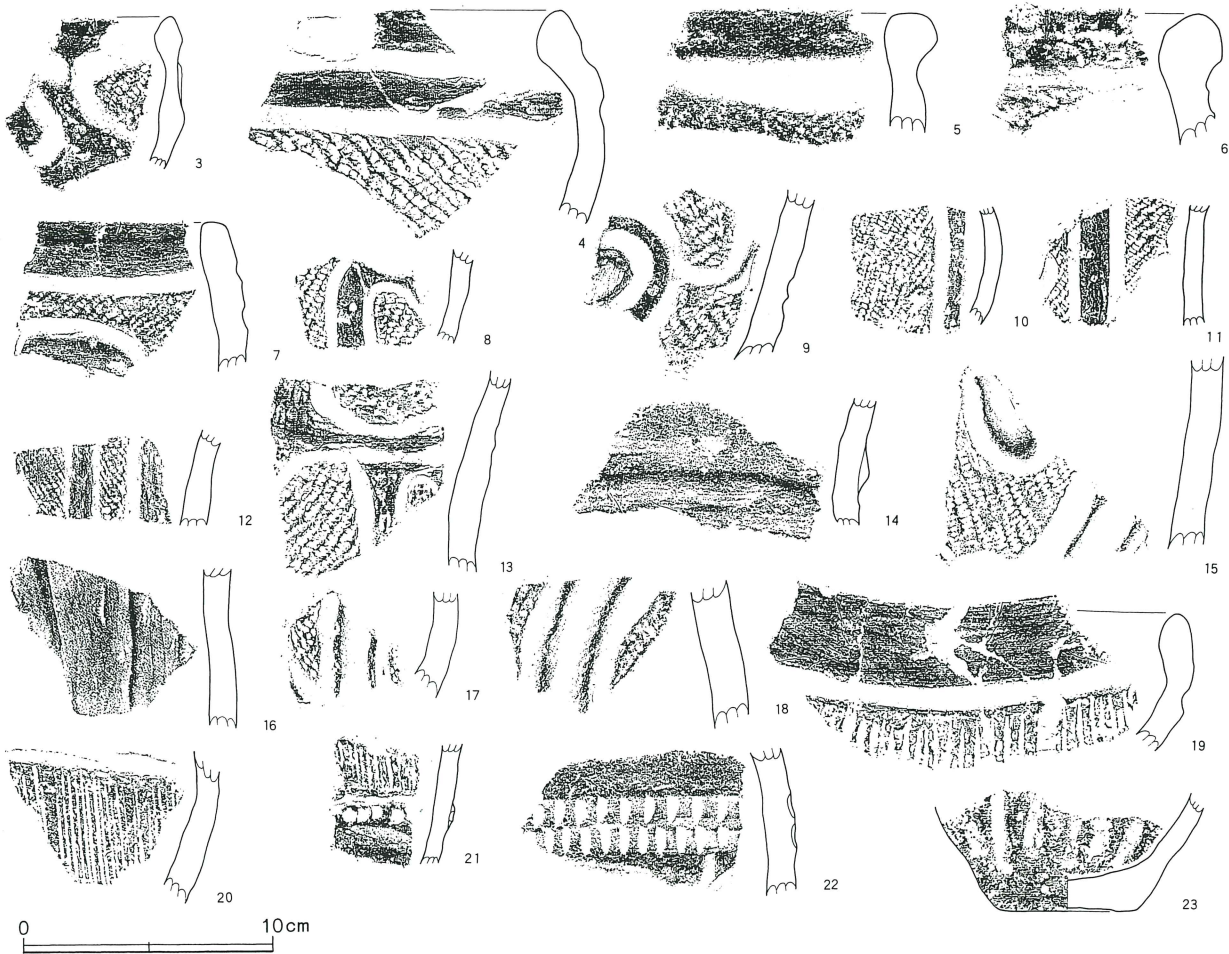
壁はほとんど残存しない。壁溝は1巡する。

炉跡は主軸線上やや南寄りに位置している。円形の

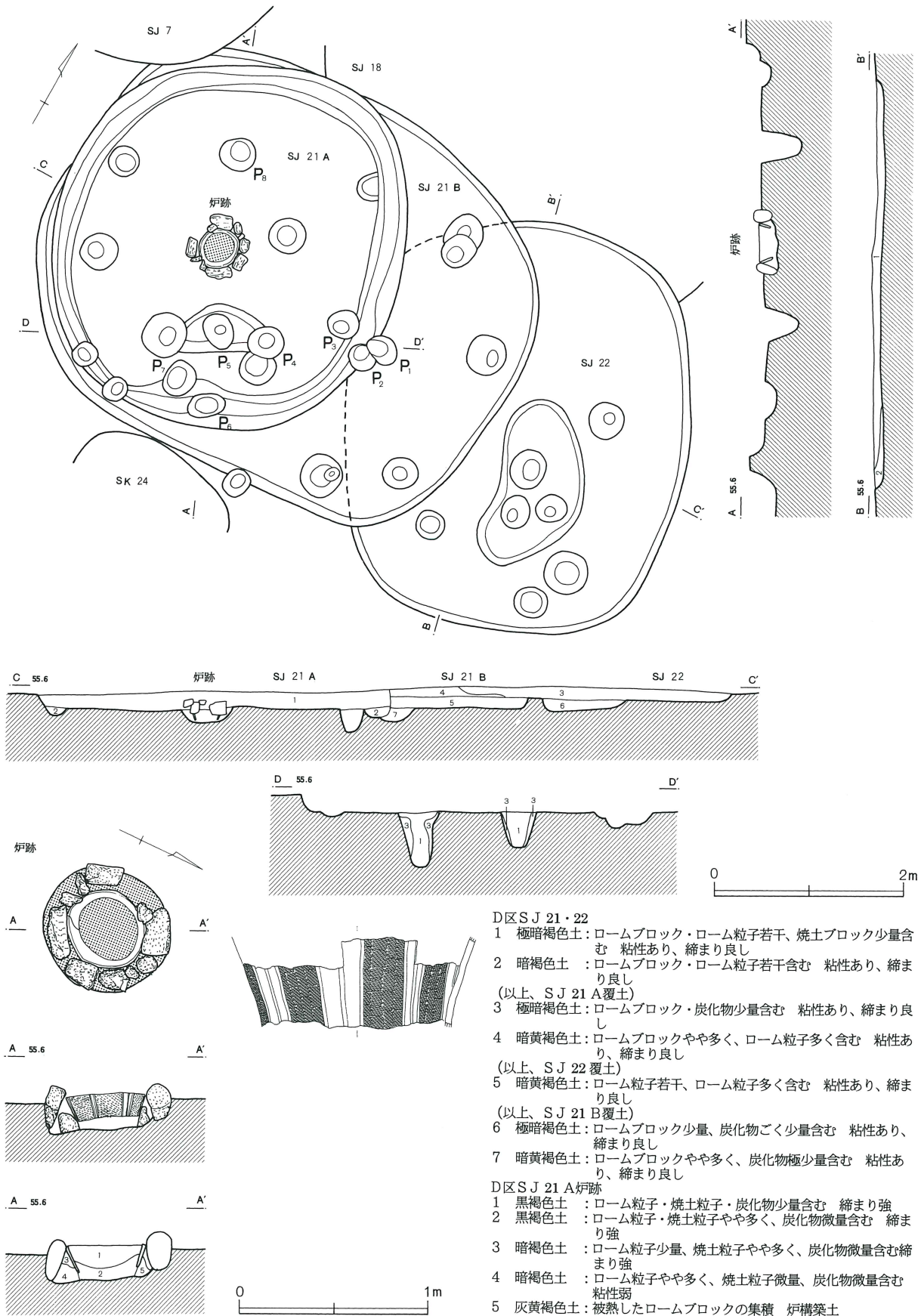
第417図 D区第20A号住居跡出土土器(2)

地床炉で、直径1 m、深さ15cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。



第418図 D区第21・22号住居跡



D区SJ 21・22

- 1 極暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干、焼土ブロック少量含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし (以上、S J 21 A覆土)
- 3 極暗褐色土：ロームブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 4 暗黄褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし (以上、S J 22覆土)
- 5 暗黄褐色土：ローム粒子若干、ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし (以上、S J 21 B覆土)
- 6 極暗褐色土：ロームブロック少量、炭化物ごく少量含む 粘性あり、締まりよし
- 7 暗黄褐色土：ロームブロックやや多く、炭化物極少量含む 粘性あり、締まりよし

D区SJ 21 A炉跡

- 1 黒褐色土：ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む 締まり強
- 2 黒褐色土：ローム粒子・焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗褐色土：ローム粒子少量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 4 暗褐色土：ローム粒子やや多く、焼土粒子微量、炭化物微量含む 粘性弱
- 5 灰黄褐色土：被熱したロームブロックの集積 炉構築土

D区第21・22号住居跡 (第418図～第422図)

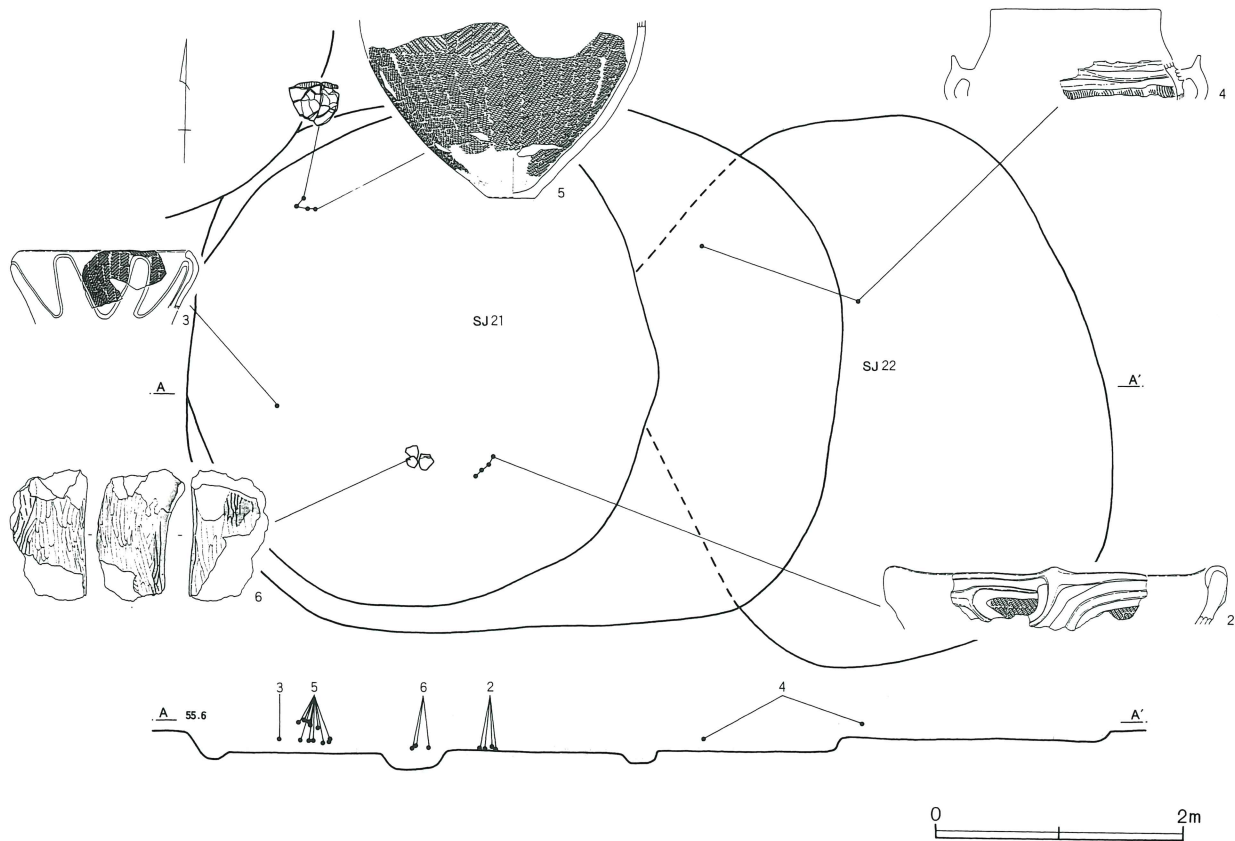
D・E-18区に所在する。3軒の住居跡の重複であり、範囲の確定した順に第21号・第22号と命名した。その後第21号住居跡が2軒の住居跡の重複であることが判明したため、あらためて第21A号・第21B号と呼び分けることとした。まず個別の住居跡について記載し、遺物に関しては末尾に一括する。

D区第21A号住居跡

第18・21B・22号住居跡を切っている。直径3.8mの不整円形の住居跡である。主軸方向はN-29°-Wを指す。壁高は残りの良い部分で15cmを測る。

壁溝は1巡し、重複は見られない。床面は平坦で、緩やかに東へと傾斜している。炉跡は石囲埋甕炉である。床面中央部に位置し、炉石は北西の一角で欠落している以外は全周している。掘り方は直径68cm、深さ16cmの円形のピットである。土器は底面から4cmほど浮いた状態で埋設されている。底面は起伏を帯びており、数点の礫が土器の下端を支えている。

第419図 D区第21・22号住居跡遺物分布図



床面上からは11本のピットが検出されているが、これらのうち炉跡の南で主軸線に直交して対峙するP4・7と、主軸線上の奥壁寄りに配されるP8が本住居跡の支柱穴と考えられる。深さ38~55cmを測る。P4とP7の間隔は約65cmである。

D区第21B号住居跡

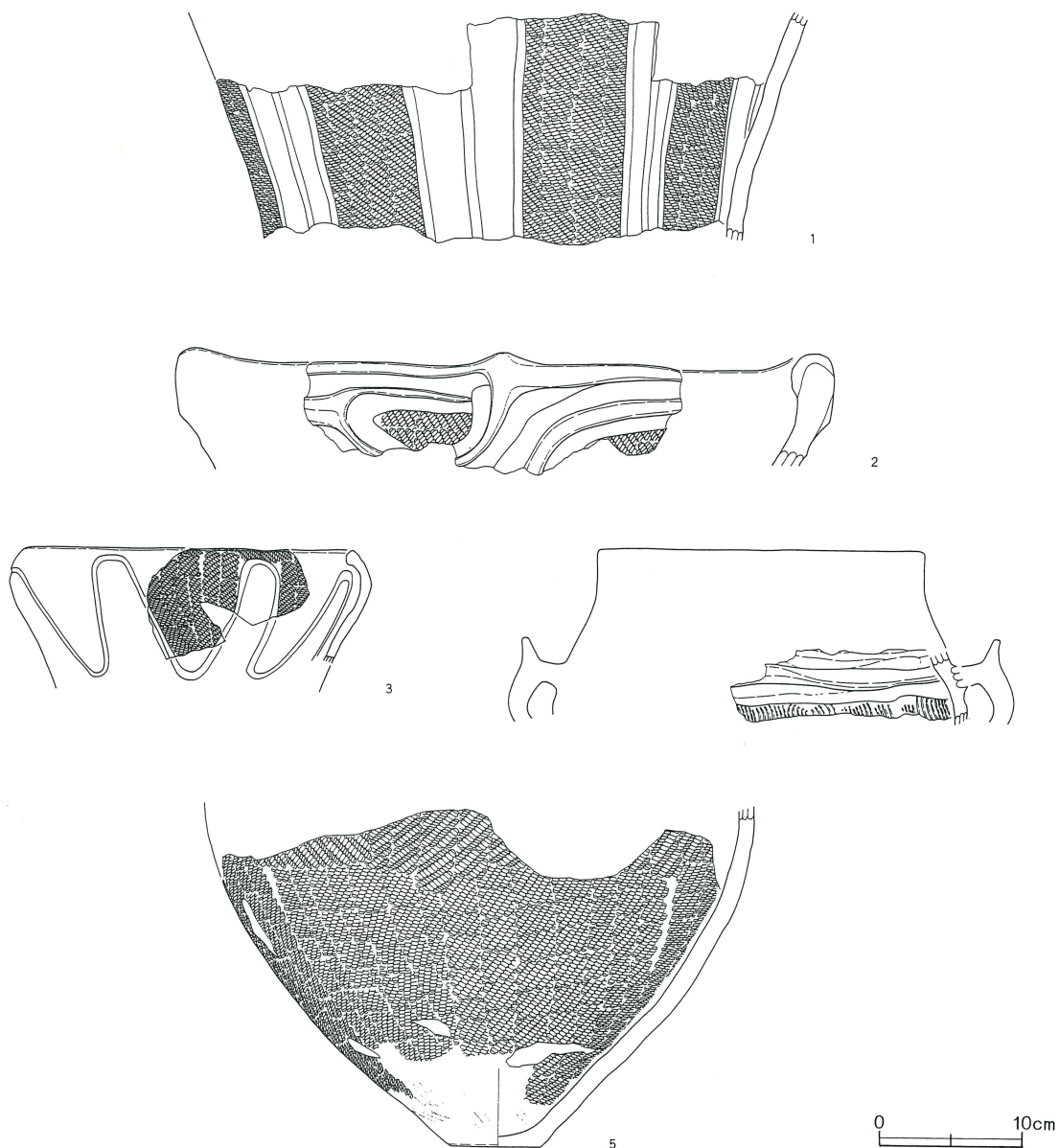
第7・21A・22号住居跡に切られ、第18号住居跡を切っている。長径5.2m、短径3.2mの隅丸長方形の住居跡で、主軸方向はほぼ東西を指す。壁高は15cmを測る。壁溝は検出されなかった。

炉跡は発見されなかった。深さ20~30cmの浅いピットが壁に沿ってほぼ等間隔に並んでいる。

D区第22号住居跡

第21A号住居跡に切られ、第18・21B号住居跡を切っている。楕円形の住居跡で、長径4.3m、短径3.2mを測る。主軸方向はN-22°-Wを指す。壁高は5cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。炉跡は検出されなかった。

第420図 D区第21・22号住居跡出土土器（1）



D区第21・22号住居跡出土土器(第420図～第422図)

第420図の復元個体は、4を除いて第21A号住居跡から出土したものである。

1は第12A号住居跡の炉体土器である。キャリパー類深鉢の胴部中段である。三本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、LR単節の縄文が縦位回転で施文される。

2はキャリパー類深鉢の口縁部である。水平口縁で、口縁部文様帯の渦巻き文の部分に小突起を配する。

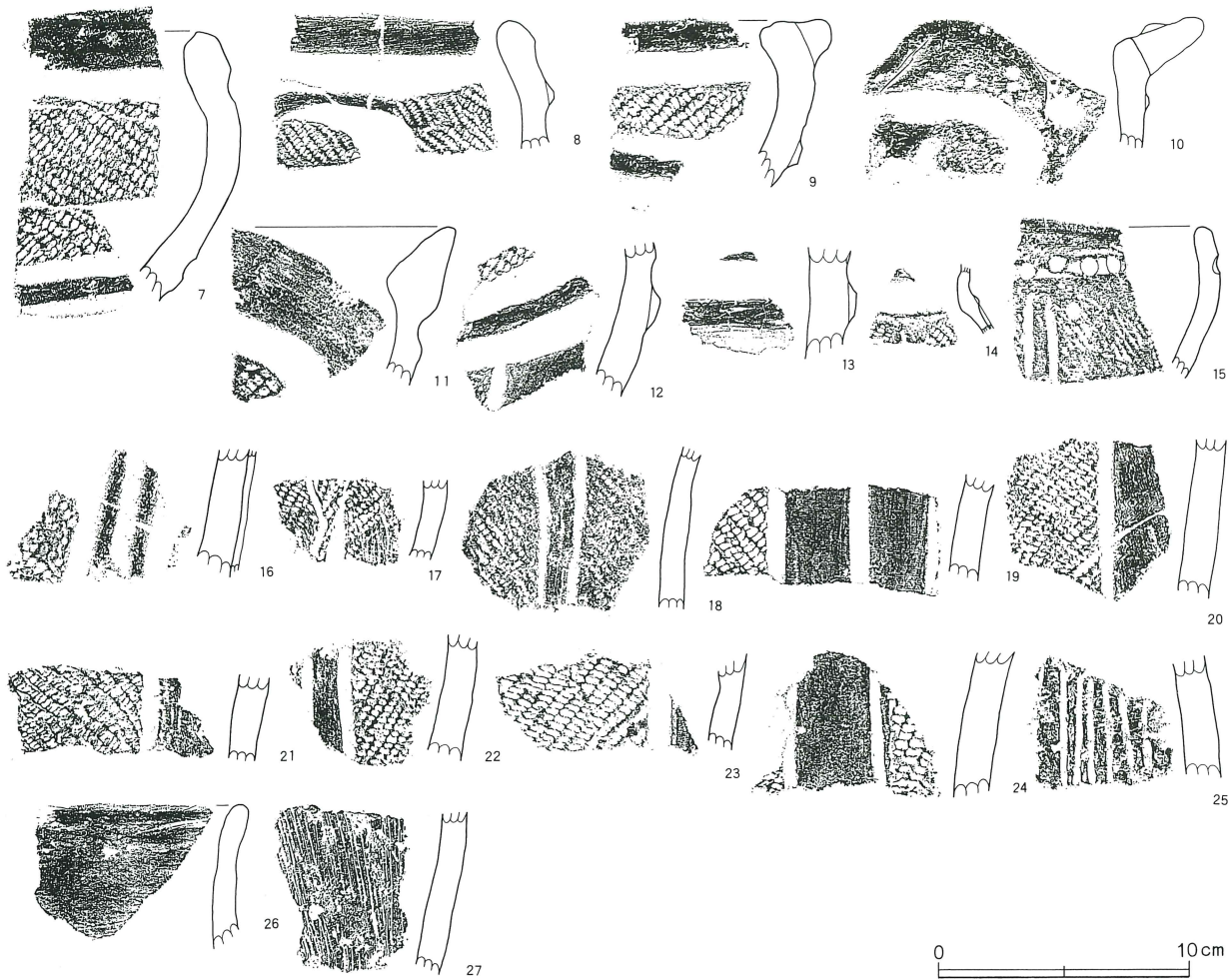
3は深鉢口縁部で、胴上半部に波状の区画が描かれ、内部が無文化する。

4は両耳壺の肩部である。上下に凹線のなぞりを伴

う隆帯が巡り、橋梁状の把手が付される。地文は櫛歯状工具の条線で、一部波状に垂下する。

5は両耳壺と思われるもので、胴部中段から上を欠失している。全面に縄文のみが施文されているが、胴部の中段と下段では施文原体が異なっている。下段の地文はRL単節の縄文で、縦位回転で施文されている。中段の地文もRL単節の縄文であるが、明らかに太さの異なるL1段の縄を撚りあわせたものである。回転方向は基本的には縦位回転で施文されるが、部分的に横位に回転される部分がみられる。これを中期末葉に顕著になる充填縄文手法の延長上にあるものとするな

第421図 D区第21・22号住居跡出土土器（2）



ら、欠失した胴上半部に存在する文様帯や把手等に施文方向を規制された可能性が高い。本資料を浅鉢でなく両耳壺と判断した理由はここにある。

第421図は第21A・B号住居跡から出土した土器片である。

7～11はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。10は波頂部に山形の突起が付され、突起背面にも渦巻き文が描かれる。12・13もキャリパー類で、文様帯下端を区画する隆帯である。

15は水平口縁で、口縁下に列点を伴う1条の沈線が巡る。16は二本隆帯の懸垂文である。17は平行沈線の懸垂文、18～24は磨消し懸垂文である。25は曾利系の隆帯文土器である。26・27は両耳壺であろう。

第422図下段は第22号住居跡出土の土器片である。1は台付き土器脚台部、2は両耳壺胴上半部の文様帯

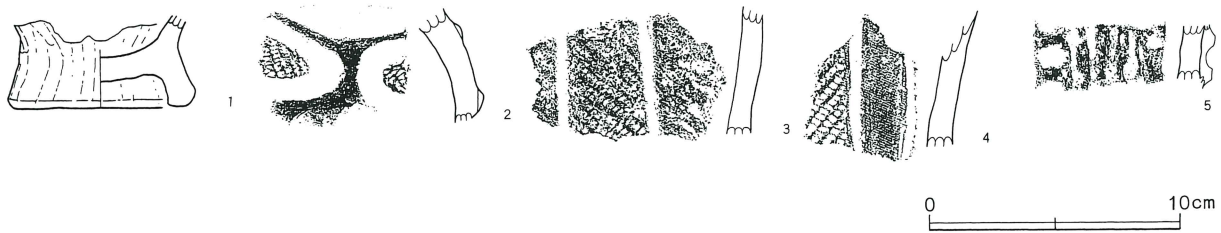
である。3・4は磨消し懸垂文、5は曾利系の隆帯文土器である。

D区第21A号住居跡出土の大型土製品（第422図）

D区第6号住居跡から出土したものと類似の土製品が本住居跡からも出土している。それぞれの遺構から出土した大型土製品が同一個体に属するものかは不明であるが、少なくとも胎土・焼成状態は類似している。2軒の住居跡の間隔は約6mである。

第422図6が大型土製品である。第6号住居跡の項における区分に従えば「腕」の部分に該当する。無文で、研磨が徹底される。湾曲する「腕」の内側、上方のややオーバーハングする部分に一列にススが付着している。また、内外面ともに被熱による変色とケロイド状の器面の剥落が観察され、この土製品が火の近くで用いられるものであったことを物語っている。

第422図 D区第21・22号住居跡出土土器(3)



D区第23・31・39号住居跡 (第423図・第424図)

E・F-18・19区に所在する。3軒が切り合った状態で検出された。新旧関係は、第39号→第31号→第23号の順に新しくなるものと思われる。

D区第23号住居跡

第31号・第39号住居跡、第26号土壌を切っている。第20B住居跡とも重複関係にあるが、新旧は不明である。直径約6mの円形の住居跡で、主軸方向はN-6°-Eを指す。壁高はもともと残りの良い部分で5cm程度である。壁溝は1巡する。

炉跡は主軸線上やや南寄りに位置する。長楕円形の地床炉で、長径1.05m、短径55cm、深さ16cmを測る。

出土土器 (第424図)

1は深鉢口縁部で、口縁下に2条の沈線が巡る。2・3はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。3は隆

帯と弧状の沈線により楕円形の区画が描かれるもので、隆帯上に縦位のわらび手状沈線が描かれる。4は篋状工具先端の押し引き文が2段に巡る口縁部である。

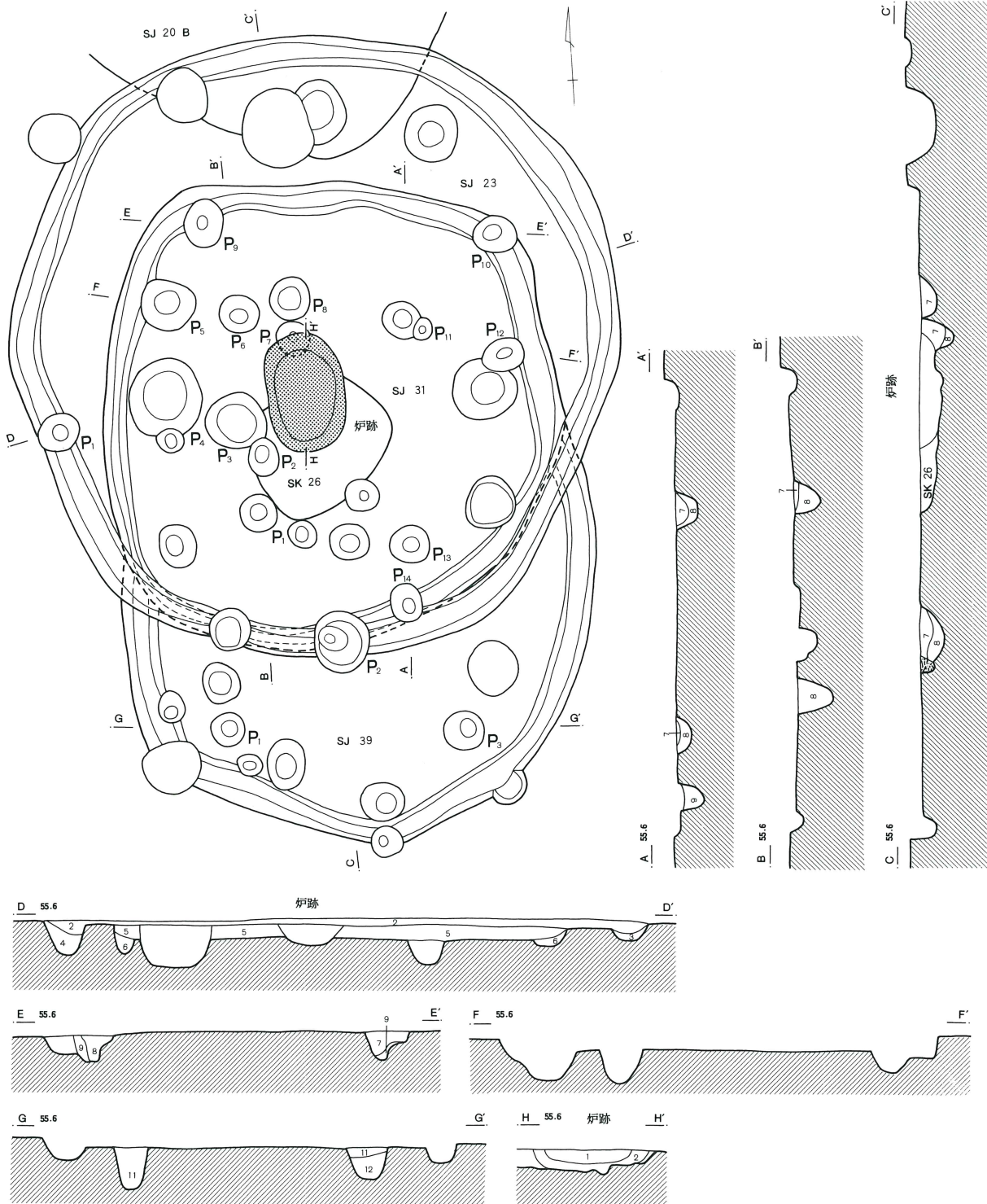
5~10は磨消し懸垂文の胴部である。5の地文部にはわらび手状、6・9の地文部には蛇行沈線が垂下する。7は逆U字の磨消しモチーフが描かれる。10は三本沈線の磨消し懸垂文である。

12の底部は底面にスダレ状編み物の圧痕がみられる。13は櫛歯状工具の条線が垂下する胴下半部で、両耳壺か浅鉢に属するものであろう。

D区第31号住居跡

第23号住居跡に切られ、第39号住居跡を切るものと思われる。第26号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。不整な隅丸長方形の住居跡で、長径4.5

第423図 D区第23・31・39号住居跡



D区S J 23

- 1 極暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物ごく少量含む
- 2 暗茶褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量含む
- 3 暗茶褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子多量含む 締めり強
- 4 暗褐色土：ロームブロック多量含む

D区S J 31

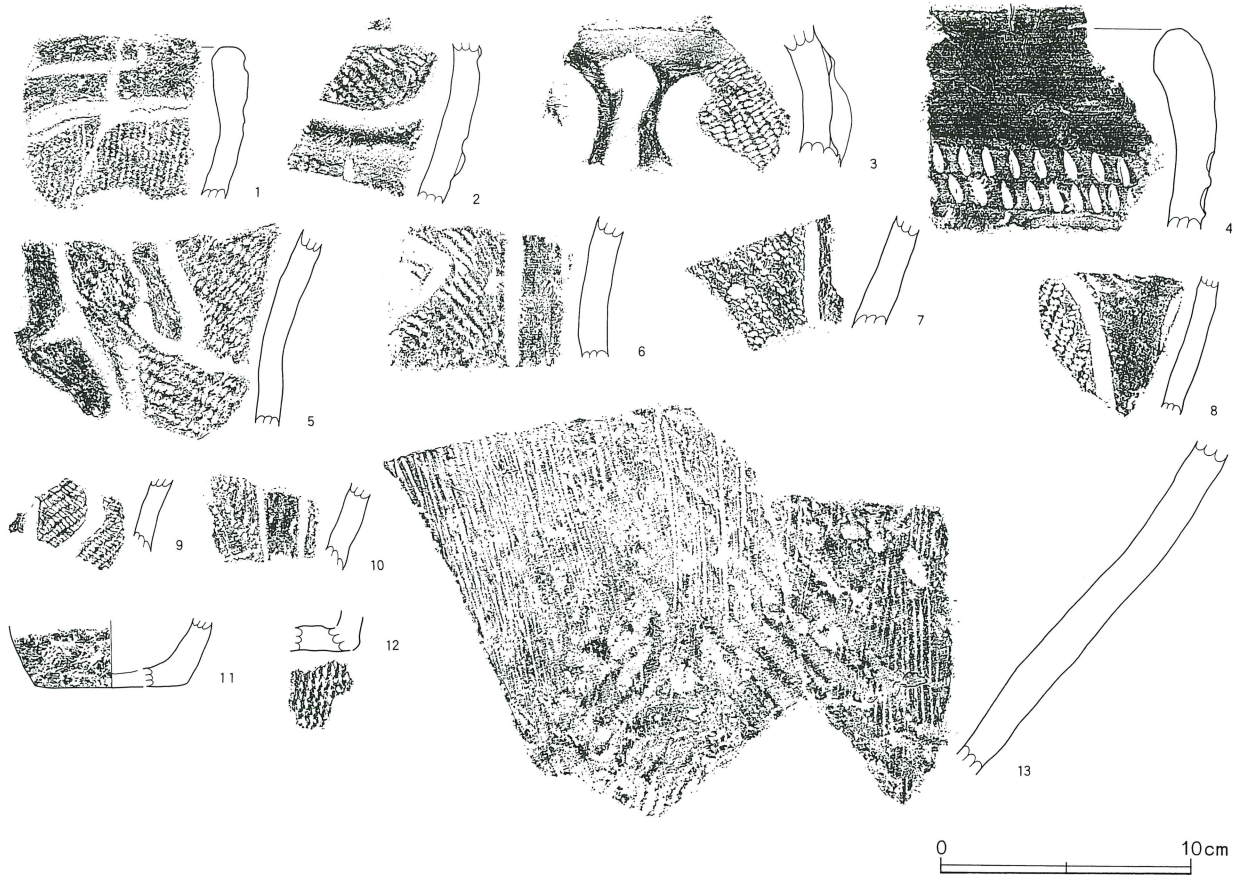
- 5 極暗褐色土：ロームブロック少量、炭化物若干含む
- 6 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む
- 7 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む
- 8 暗褐色土：ロームブロック多量含む
- 9 暗褐色土：ローム粒子多量、炭化物微量含む

D区S J 39

- 10 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む
 - 11 暗黄褐色土：ロームブロック多量含む
 - 12 暗黄褐色土：ローム主体に若干の暗褐色土を含む
- D区S J 23 炉跡
- 1 暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子・炭化物少量含む
 - 2 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子やや多く、炭化物若干含む



第424図 D区第23号住居跡出土土器



m、短径4mを測る。本住居跡の床面は第23号住居跡の床面の下に存在し、両者の比高差は約15cmである。

壁溝は1巡する。床面はほぼ平坦である。炉跡は検出できなかった。床面上から多数のピットが検出されたが、柱穴配置は不明である。

D区第39号住居跡

第23・31号住居跡に切られるものと思われる。長径5mほどの楕円形の住居跡であると思われるが、詳細は不明である。壁高は約15cmで、壁溝は全周する。炉跡は検出されなかった。柱穴配置は不明である。

D区第24・46・49号住居跡（第425図・第426図）

D・E-17・18区に所在する。3軒が重複した状態で検出された。壁がまったく残存していないため新旧関係は明らかでないが、第24号の炉跡が第46号の壁溝を切っているため、前者が後者より新しいことだけは確かである。

多数のピットが検出され、さらに数件の住居跡が重

複している可能性もあるが、壁溝の巡りが明確なものについてのみ遺構として認定した。

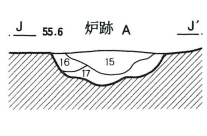
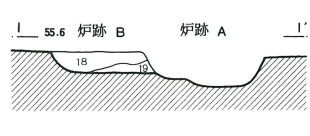
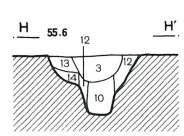
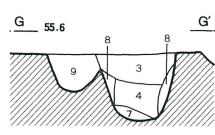
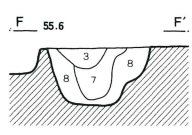
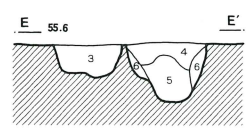
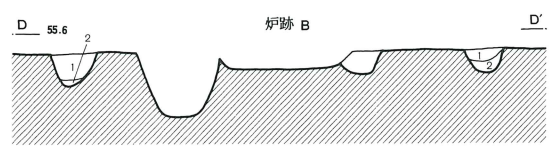
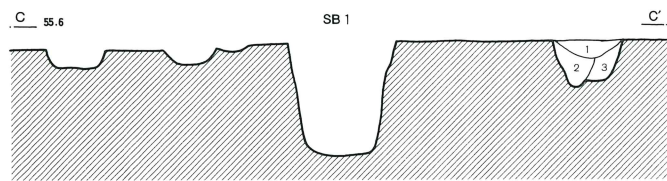
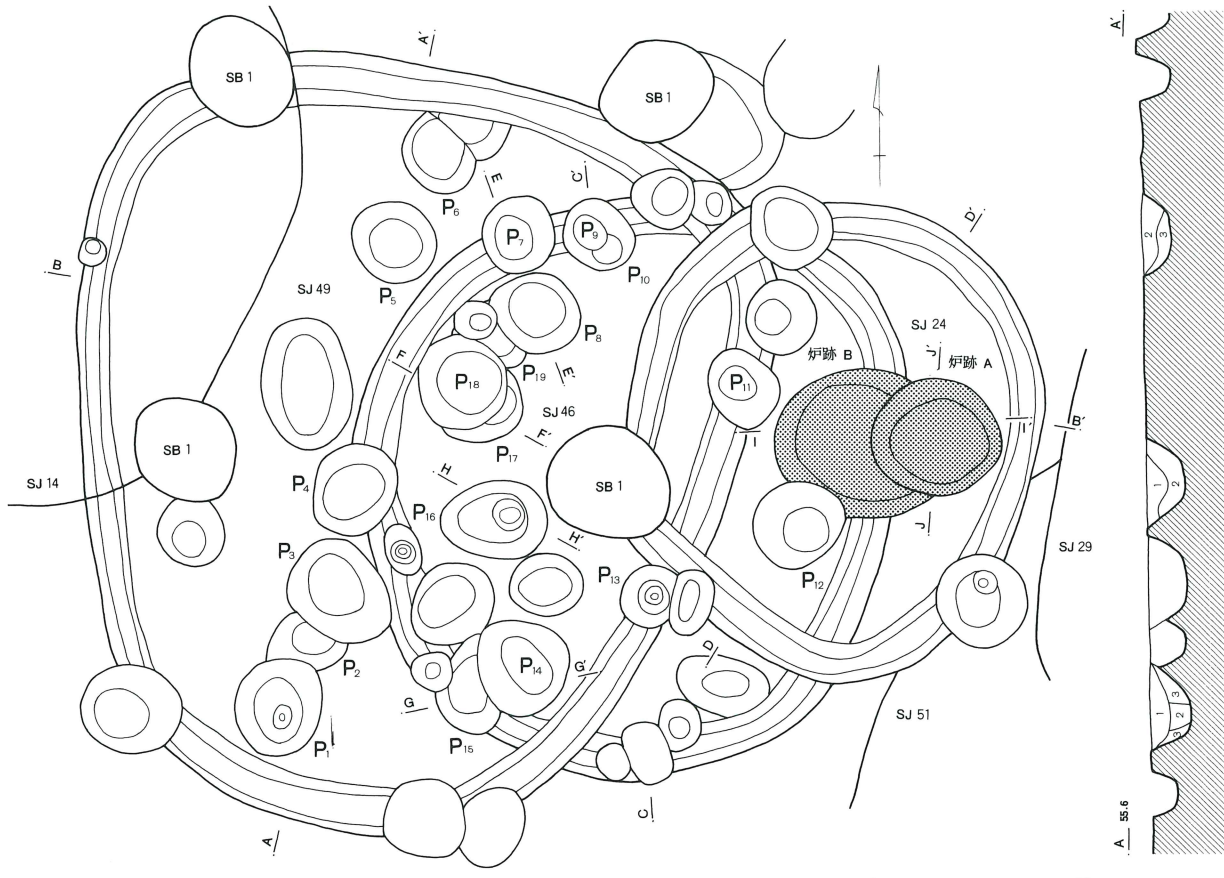
D区第24号住居跡

第46号住居跡を切っている。第49号住居跡・第1号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。長径3.6m、短径3.3mの楕円形の住居跡である。主軸方向はN-32°-Eを指す。壁は残存しない。壁溝は1巡する。炉跡は2基が東西に切り合っただけで検出された。東寄りのものを炉跡A、西寄りのものを炉跡Bと命名した。新旧関係は前者が後者を切るものと思われる。炉跡Bは住居跡の中心に位置しているが、炉跡Aについては若干東にずれるため、本住居跡を切る別個の住居跡に属するものとすべきかもしれない。

出土土器（第426図）

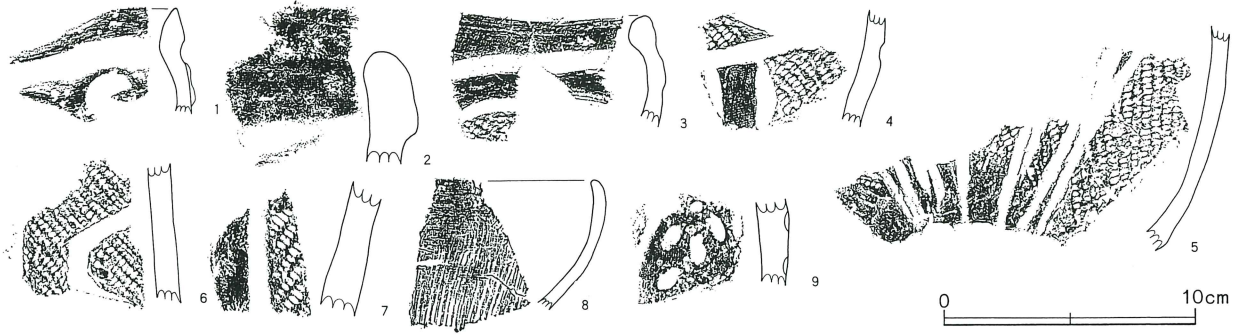
1～3はキャリパー類深鉢の口縁部である。4は同種の深鉢の口縁部文様帯下端である。5～7は磨消し懸垂文が垂下する胴部である。8は条線のみの口縁部、

第425図 D区第24・46・49号住居跡



- D区S J 24・46・49
- 1 暗褐色土 : ローム粒子多く、焼土・炭化物微量含む 粘性弱、締まり強
 - 2 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 粘性あり・締まりあり
 - 3 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量含む 粘性なし・締まりあり
 - 4 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子微量含む 粘性なし、締まりあり
 - 5 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 粘性あり・締まりあり
 - 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子極めて多量含む 粘性あり・締まりあり
 - 7 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む 締まりなし
 - 8 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多量、ローム粒子多量含む
 - 9 極暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
 - 10 褐色土 : ロームブロック極少量、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まり良し
 - 11 極暗褐色土 : ロームブロック極少量、ローム粒子少量含む 粘性あり・締まりなし
 - 12 暗黄褐色土 : ロームブロック多量、ローム粒子やや多く含む
 - 13 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
 - 14 暗黄褐色土 : ロームブロック多量、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まり良し
- D区S J 24 炉跡
- 15 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
 - 16 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
 - 17 褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
 - 18 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、焼土粒子若干、炭化物微量含む 締まり強
 - 19 褐色土 : ローム粒子少量、焼土ブロック極めて多く含む 締まり強

第426図 D区第24号住居跡出土土器



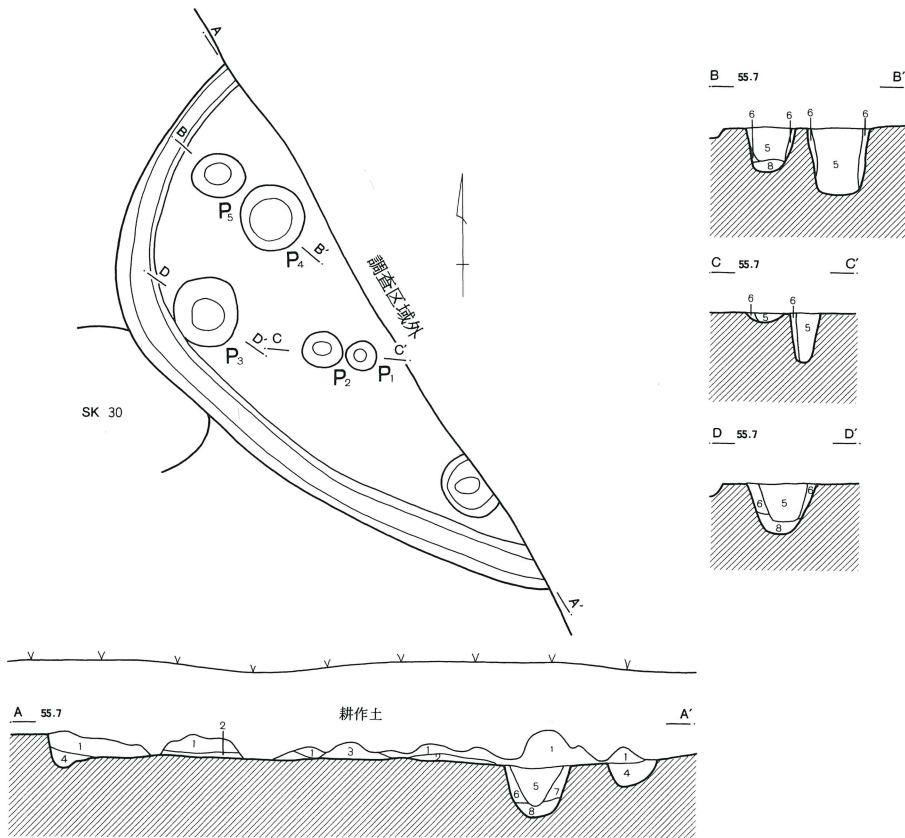
9はハの字の列点が施文される胴部である。

D区第46号住居跡

第24号住居跡に切られるほか、第14・49号住居跡・第1号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、新旧関係

は不明である。長径4.5m、短径4.2mの楕円形の住居跡で、主軸方向はほぼ南北を指す。壁は残存しない。壁溝は1巡する。炉跡は検出されず、柱穴配置も不明である。

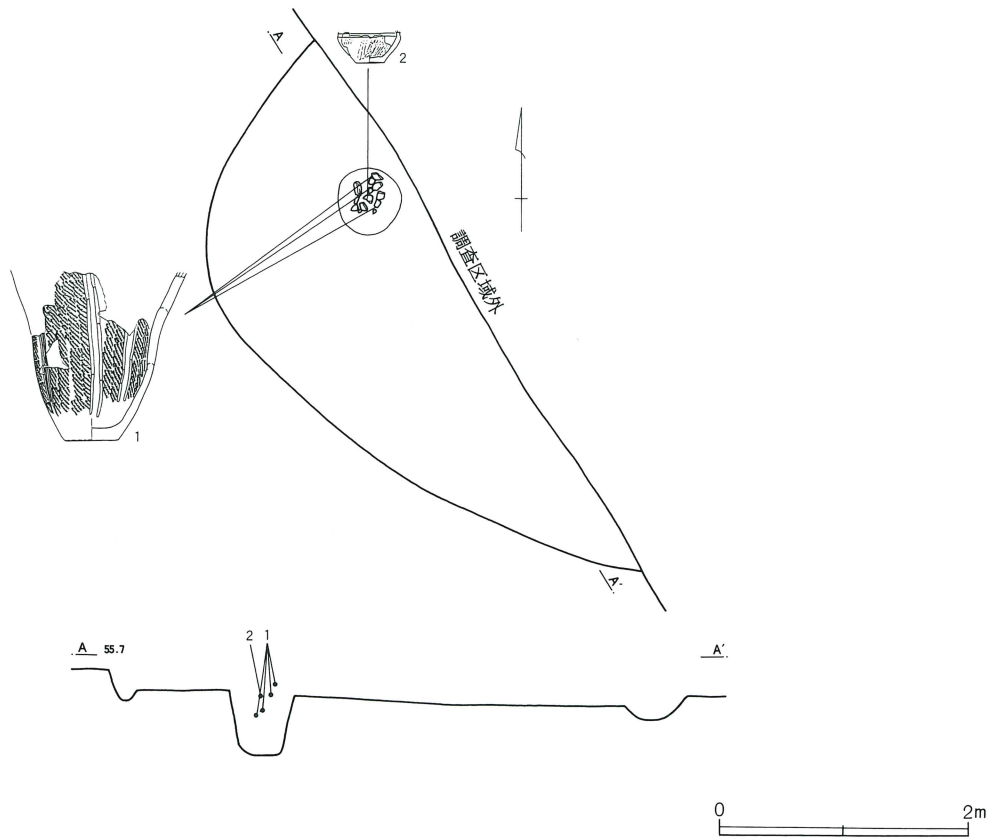
第427図 D区第25号住居跡



D区S J 25

- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 2 褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗赤褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物少量含む 締まり強
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まり強
- 5 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化物やや多く含む 締まり強
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まりやや強
- 7 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く、炭化物やや多く含む 締まり強
- 8 褐色土 : ローム粒子多く含む 締まりやや強

第428図 D区第25号住居跡遺物分布図



D区第49号住居跡

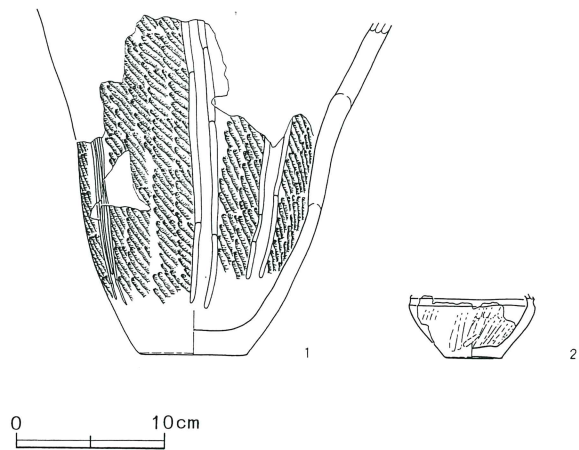
第24号住居跡に切られるほか、第46号住居跡・第1号掘立柱建物跡等とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。北に開く隅丸台形の住居跡で、長径6m、短径5.2mを測る。主軸方向はN-11°-Eを指す。壁は残存しない。壁溝は1巡する。炉跡は検出されず、柱穴配置も不明である。

D区第25号住居跡（第427図～第430図）

F-18区に所在する。第48号住居跡・第30号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。大半が調査区域外に存在し、西コーナーから南西壁の一部だけが調査された。部分的な調査であるため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向は不明である。壁高は残りの良い部分で13cmを測る。壁溝は検出されなかった。

炉跡は検出されず、調査区域外に存在するものとみられる。床面上から6本のピットが検出された。西コーナー付近に一定規模のものが集中しているようだが、全体の柱穴配置は不明である。P4の覆土上層からは

第429図 D区第25号住居跡出土土器（1）

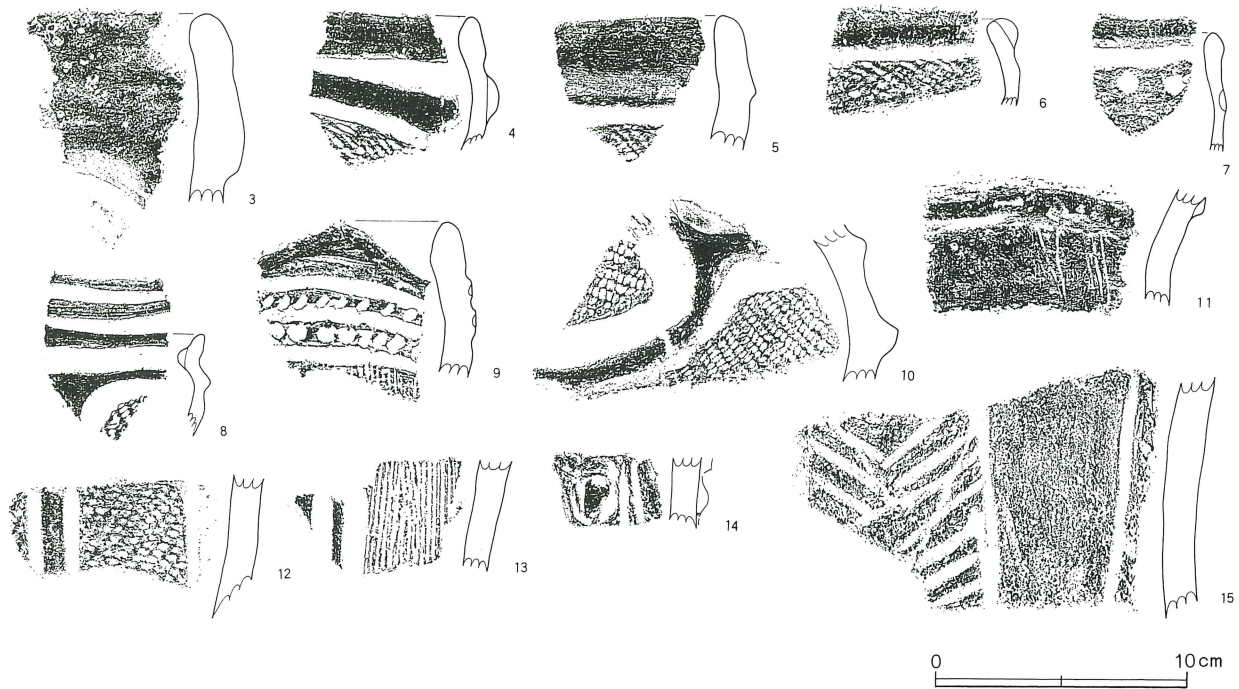


第429図にあげた2点の復元個体が出土している。このほか、覆土中から中期後葉から末葉の土器が出土している。

出土土器（第429図・第430図）

1はP4から破片の状態出土した深鉢である。胴上半部から上を欠失している。幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。地文はL無節の縄文が縦位回転で施文さ

第430図 D区第25号住居跡出土土器（2）



れる。底径7cm、現存高22.7cmを測る。

2は1と一緒に出土したもので、小型の浅鉢と思われるものである。胴上半部を欠失する。胴部中段に1条の沈線が巡り、胴下半部は無文で、斜め方向の研磨調整がみられる。底径3.7cm、現存高3.8cmを測る。

3・4はキャリパー類深鉢の口縁部である。8もキャリパー類深鉢の口縁部であるが、波状口縁で、口唇内面に隆帯が巡り、ここに1条の沈線が巡る。5は口縁下に1条の微隆起線が巡る。6は口端直下に1条の隆帯が巡る。7は非常に薄手の口縁で、口縁下に凹線が巡り、これに沿って円形の刺突列が巡る。

9は連弧文系の深鉢口縁部である。山形波状口縁で、口縁下に平行沈線が巡り、沈線間に篋状工具先端による斜位の刺突が施される。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。10はキャリパー類の口縁部文様帯か、あるいは両耳壺胴上半部の文様帯である。

11は深鉢の頸部無文帯である。口縁部との境は1条の隆帯で区画される。

12・13は磨消し懸垂文の胴部である。12の地文はR L単節縦位回転の縄文、13の地文は櫛歯状工具の条線である。

14は曽利系の隆帯文土器である。棒状工具の刻みを伴う隆帯が垂下し、縦位の集合沈線を地文とする。15は平行沈線による幅広の懸垂文が垂下し、地文は矢羽根状の集合沈線である。

D区第26・43・48号住居跡（第431図～第436図）

F-17・18区に所在する。3軒が重複した状態で検出された。ただし、第43号住居跡は炉跡のみの検出である。

炉体土器・埋甕の残存状態から第48号住居跡が第26号住居跡より新しく、第43号住居跡は第26号住居跡の覆土を切っていることから、3者のうち最も新しいものとみられる。

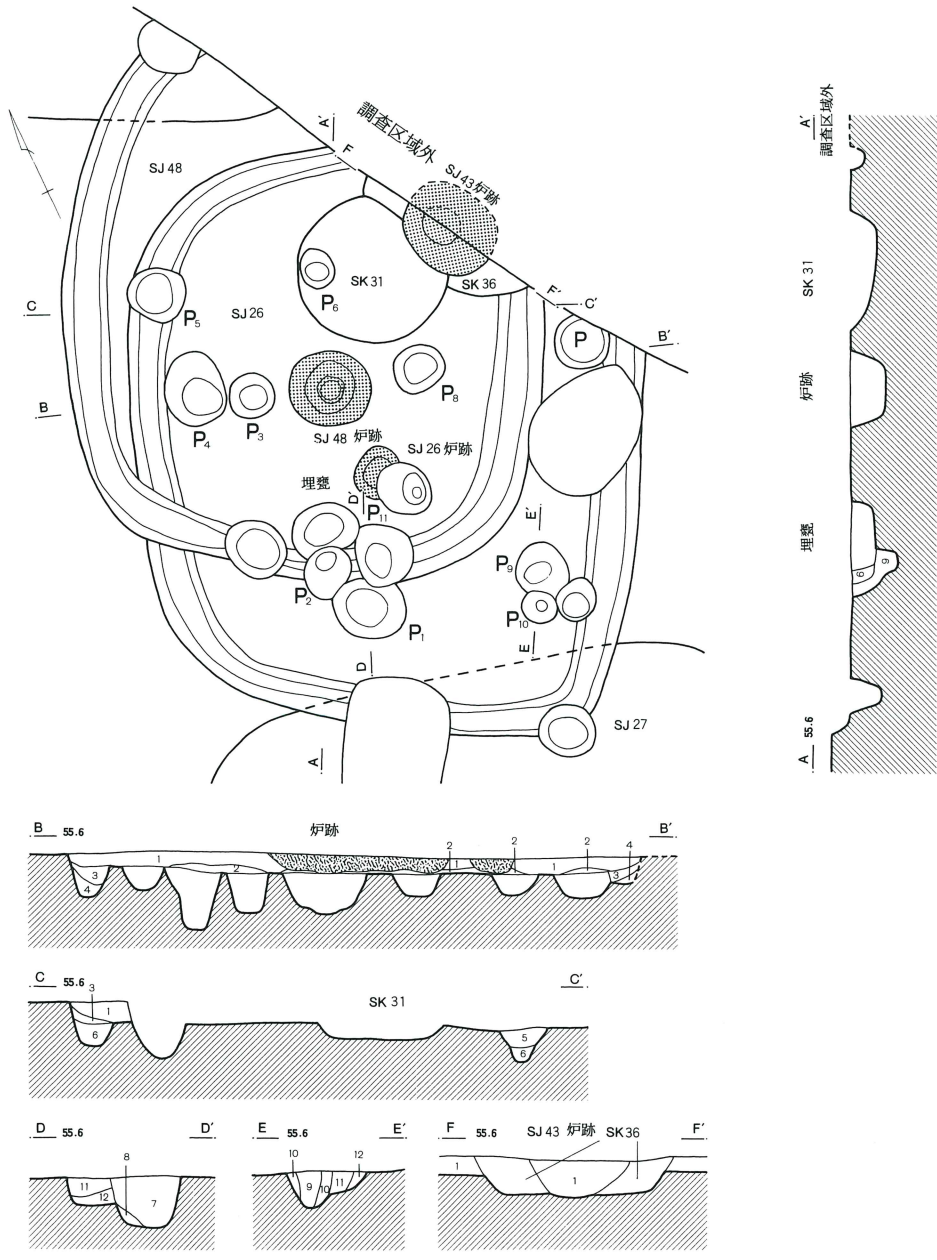
これらの住居跡の覆土はトレンチャーによる攪乱によって広範囲の破壊を受けている。

第26号住居跡

第43・48号住居跡、第36号土壇に切られるほか、第27号住居跡、第31号土壇などとも重複するが、新旧関係は不明である。

隅丸長方形の住居跡で、北東コーナー部分が調査区域外に存在する。長径4.4m、短径3.9mを測る。主軸方向はN-27°-Eを指す。壁高は13cmを測る。床面

第431図 D区第26・43・48号住居跡



D区S J 26・48

- 1 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量含む 粘性あり、締まりあり
- 2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子少量含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 4 黄褐色土 : ロームを主体に黒色土少量含む 粘性に富み、締まりよし
- 5 暗褐色土 : ローム粒子多く含む 粘性あり、締まりよし
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性に富み、締まりよし
- 7 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む
- 8 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 9 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 10 暗褐色土 : ローム粒子多量に含む
- 11 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物多量含む 粘性あり、締まりよし
- 12 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む

D区S J 43 炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物微量含む

